左まで必要條件には非るべしと雖も、さもあらばあれ、普通一般を平均すれば、善良なる感情は之れに適當なる外面上の表章を喚起するものにして、人は常に其の感情を實現せん事を務め、又屢々之れを表章するに依り其の意思をして益々善良なる方向に誘導する事あるは、恰も『愛は發言によりて成長す』と云へる諺の如し、默々裡の愛は終に枯死するの恐れあり、蓋し宗教上一切の儀式は此の圍範内に於て成立し得るものなりと知るべし。

問　日曜日を以て、宗教的聖日の如くなせる主意如何。

答　元來一周間に一日の休暇を置くは、猶太人の十戒の一に於て、六日間勞働し、一周の末日、即ち今の土曜日を以て安息日と定めたるは、彼の創世記に神天地を創造するに六日の日子を要し、第七日に於て神は自己の成効を祝して安息せりとの口碑に原づける、猶太人の遺風なり、然るに基督教徒は口碑に所謂基督死後の昇天日は一周の始たりしとの故を以て、其の安息日を改めて日曜日となし、之を安息日とのみせずして祝日とせり、然るに基督教徒にして今猶ほ日曜日を以て猶太流儀の究屈なる安息日とのみ思ひ做す者少からず、現今此の一週間一日の休暇を定むるは、歐米各國一般の風俗となり、近年我が國に於ても亦日曜日を以て諸官省學校及び會社等の休息日となれり、是れ一は各國と交際上の便利より出づるものにして、又一は七日間一日の休息を與ふる風習は、國家が或る社會に與ふる恩惠たる可ければなり、故に今日吾人は此の恩惠に霑ひ、之れを以て宗教的性行の發達を助長する處の課業を修むるの用に供するものにして、吾人豈敢て日曜日は他の六日よりも特に聖なる日なりと迷信せんや、國家若し一六の日を以て休日とせば、吾人

は喜んで之れを利用すべし、然るに世人往々日曜日を以て外國の御祭の如く誤認し、若し此の日に於て宗教的事物の攻究を爲す者あらば、直ちに之れを以て外國の宗旨家なりとするは、淺近と云はざるを得ず、是れ恰も「ズボン、マンテル」の兵士を見て盡く外國の兵士なりとすると同樣にして事理を解せざる者と云ふべし、譬ひ外國の衣服たりとも、一旦之れを自國に應用せば、既でに自國の服制なり、故に一週間の末日即ち土曜日の休暇は、元來猶太人の風俗にして基督教は之れを日曜日に改め、歐米諸國に基督教の傳達すると同時に歐米人の風俗となり、今や又我が國風の一部たらんとするに至れるものなり。

問　聖人の降誕を祝するは如何。

答　吾人は現今四聖人として、釋迦、孔子、耶蘇、索克拉底の降誕を祝せんが爲め、毎年四季に一回宛便利なる日を撰びて祝賀の日とす、然れども單に是れ等四聖人のみに限りたるには非ざる可しと雖も、只だ此の四聖は宗教界、道德界に代表的人物たるを以て、此の四聖人の下に一切の聖賢の記念を含蓄するものなり、之れに依りて古への大德を追懐し、之れを贊嘆し、以て吾人が德性の「リヴィヴァル」(興奮)を催進するものなり。

禮拜

問　太古の人種は如何なる行爲に依りて、神の恩惠を得べしと想像せしや。

答　未開にして野蠻なる太古の人種は、神を以て當時の未開なる人間

社會の專制と抑壓とを恣にせる帝王の如き者となし、之れが恩惠に浴せんと欲する者は、貢物を供捧し、其の威力を謳歌し、其の前に拜跪するを以て第一の勤務となし、之れに依り始めて神の滿足を購ひ得べきものなりと想像せり。

問　現今の社會に於ても亦如此方法を以て、禮拜の要素とせるものなきや。

答　現時通俗の宗教社會に在ては、猶ほ神を以て或る恐る可く親む可からざる王者の如くに想像し、斯る卑近の行爲を以て神佛に奉仕する者少なからざるのみならず、或る社會に在て斯る卑近の行爲を以て、全く宗教的本質とし、少くも宗教的最大緊要條件の一と思考するものあり、是れ等は猶ほ蠻風を脫せざる下級の宗教的思想にして、早晩此の社會より消滅し去らざる可からざるものたるべし。

問　禮拜とは如何なるものなりや。

答　禮拜とは自己の信奉する神に對つて、恭敬愛慕の至情を致すの謂にして神の稜威と智能、神の善美と仁愛を吾人人類の衷心より欽賞嘆美するの眞情を云ふ。

問　敬神の至情を表明するに當りて、吾人は如何なる方法を用ゆ可きや。

答　吾人は健全なる感情の法則に從ひ極めて適當なる方法に依りて敬神の衷情を致すを得べし、一例を以て云へば、吾人の潔白なる感情をして益々高尙ならしむるを得可き、純潔高尙なる詩歌を詠吟し、以て其の至情を迸出せしむるを得べく、或は自己の赤心を神前に捧げ俯仰以て天地の間に恥ぢなきの言行云爲あるは、是れ即ち

敬神の至情を表白するものと云ふべし、故に各國の人民は既でに世間に認識せられたる、人類理想結合の法則に隨ひ、自然に或る一の場處或は境遇に於て人間の高尚なる思想及び感情の發動を助長せんが爲めに、各國各邑の人々咸な宮殿、堂宇を建築し、以て衆人禮拜の聖所となすものなり。

問　敬神の念慮は、何を以て人間に向つて斯く必要なるものなりや。

答　敬神の念慮とは善德を欽賞愛慕するの謂にして善德を瞻望する者は、既でに善道の方向に傾注す。善道は人間社會一日も缺く可からざるものなるを以て敬神の念慮の必要なる由緣夫れ茲に存するものと知るべし

問　感謝とは如何なるものを云ふや

答　感謝とは懇切、慈悲、恩愛を受けたる時之れを喜び且つ之れに酬ひんとする義務の感情を云ふ。

問　神は人類の感謝を要求するものなりや。

答　吾人不肖者の感謝、無限の神に於て何かあらん、然れども恩を受くる者は之を喜び之れに酬ひんとするは人心自然の通則にして、吾人は之れに依りて自己の内界の神性と德性を損傷し或は汚瀆するものに非らず、反て高尚なる自己の道心を涵養し滿足せしむるを得可ければ、人の天恩に對して感謝の情を發動せしむるは至當の所爲たるなり。

問　吾人の眞實なる禮拜は果して神慮に適ふものなりや。

答　然り、嚴肅なる眞誠の禮拜は愛の理に在て神の聖旨を吾人人間の意思と一致せしめ得るを以て、吾人は宗教的に之れを云へば、神の聖旨に適ふものなりと云ふを得べし、何となれば神は愛なり、而し

て神の子たる吾人の生命は此の一致の場合に於て全然愛の一點に集注し終に純愛に化すべし、故に神其の愛を喜び給ふ、されば愛の精神なきの禮拜は所謂蛙鳴と一般にして徒事たるべし。

問　耶蘇は如何なる禮拜の標本を吾人に示せしや。

答　耶蘇は當世の人に告げて曰へらく、『爾祈る時に僞善者の如くする勿れ、彼れ等は人に見られんが爲め、會堂や街衢の隅に立ちて祈る事を好む、我誠に爾等に告げん、彼れ等は已でにその報賞を得たり、（他人より熱心家と思はれしのみにして、必竟他人に見られんが爲めに祈るものなれば、他人より熱心家と見られれば已でに足れり）爾祈る時は嚴密なる室に至り、戶を閉ぢて隱微たるに在す爾の父に祈れ、然らば隱微たるに鑑たまう爾の父は明顯に報ひ玉ふべし、爾祈る時は異邦人の如く重復言を云ふ勿れ、彼れ等は言多きを以て聽かれんと思へり、是故に彼れ等に倣ふと勿れ爾曹の父は求はざる先に其の需用物を知りたまへばなり、然れば爾曹かく祈るべし『天に在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成る如く地にも成せ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へ給へ、我儕に罪を犯すものを我がゆるす如く、我儕の罪をも免し給へ、我儕を試惑に遇せず、惡より救ひ出し給へ』と、又曰く『神は靈なり之れを拜する者も亦靈と誠實とを以てすべし、神は斯く拜する者を需給ふ』と教示せり、

問　教會等に於て、衆人相共に神を禮拜するの主意如何。

答　正義と仁愛を尊重し、之れに從順なる可きは何人と雖も皆同一轍にして、其間敢て異背なかるべし、然らば即ち斯る自然の一致を以て、衆人相共に敬神の念慮を表章するは、彼の僞善者流の他人に見られんが爲めにする虛禮に陷らざる限り、大に人生を裨益するも

のなり、何となれば之れに依りて、吾人々類は天父の下に在て盡く同胞なりとの感をして、益々深からしむるを以てなり。

問　活ける禮拜とは如何なるものなりや。

答　善良なる思想、善良なる言行即ち善良なる生涯は、吾人之れを眞誠なる禮拜と云ひ、此の禮拜は靈と誠とを以て恒の心となせし結果たるが故に神は如此靈と誠とを以て拜する者を愛で給ふ、神は既でに世俗の輕跳者流の燔祭或は長廣舌にして虛飾的禮拜に厭き給へり。故に吾人は人間の善良勤勉なる生活を以て之れを生ける禮拜と云ふ。

祈禱

問　核提の嬰兒が兩親に向て懇求する目的如何。

答　嬰兒は之れにより兩親の意思を抂げて、自己の意思に同情を表せしめんと欲するものなり。

問　如此幼稚の域を脫せる小兒にして、猶ほ是れと同樣に思考するものなりや。

答　小兒は漸次身躰と智力との發達するに從ひ、自己の意思よりも兩親の思想は遙かに事物の利害を辨別し能ふものなる事を知ると共に、慈愛ある兩親は、何事に限らず、萬事其の子女の爲めに利益を圖るものなるを知るに至る、故にもはや智識の耕耘を始めし小兒は、父母に對し强て我慾の遂行を主張せざるに至るべし。

問　善良なる父母の家庭に生長せし子女は、如何なる事を其の兩親に求むるものなりや。

答　斯くの如き子女は、其の父母の意旨のある處を觀察し、一意專念之れに從順ならん事を期するものなり。

問　親子間の最高尚なる關係は如何なるものなりや。

答　親子たる者は互に其の意思の交通によりて、好意と同情とを表章するものにして、親は只だ子の爲めに盡し、子は又父母の高恩を報ぜんと務むるは、人心自然の至情にして、世上若し道德と名づく可きものあらば、余輩は此の至情を以て其の第一に位するものなりと云ふを憚らざるべし。

問　如何なる小兒は強て其の父母の眷顧を貪り求むるものなりや。

答　頑是なき者、無教育なる者、利己心深き者は、其の父母の恩顧を貪らんとするものなり。

問　如何なる小兒は、父母の眷顧を貪らさるものなりや。

答　思慮深き者、親切なる者、孝心なる者は敢て兩親の恩顧を貪り求めざるものなり。

問　他人よりも猶ほ更らに多量の幸福を得んと欲して、神に向ひ頻りに祈禱し懇求する者は、果して思慮深き者なりや。

答　斯の如き者は淺慮なる兒童に等しく、彼れ等は自己の賤しき懇求に依りて、神の聖なる意思を翻へし、以て自己の賤劣なる私慾に服從せしめんとする者にして、要するに斯くの如き者は、神聖なる天父を以て、自己の利慾の奴僕と爲さんとする者にして、木に緣て魚を需むるよりも遙かに難事にして、必らずしも其の目的を達し得らる可きものには非ざるなり。

問　何をか神の聖旨と云ふや。

答　神は一視同仁の聖旨を以て、此の蒼生を赤子の如く鑑給ふが故に、人にして求めざるも之れが爲め常に其の必須なる幸福を吾人に給與せんとするものなり、故に古人の歌にも『心だに誠の道に適ひなば禱らずとても神や守らん』と云ひしは、是れ之れを云ふなり。

問　利己的祈禱は何に比すべきや。

答　是れ恰も無學文盲なる兒童の頑是なき請願に等しく、之に對して傾聽の價なきものなり。

問　如何なる祈禱は神慮に適合し、此の宇宙進渉の方針に契合するや、

答　此の宇宙は天爻の宇宙にして、森羅萬象は盡く共に正善の方向に進渉せるものなれば、此の神聖なる天然力の傾向に伴ふ可き、正善と愛心との企望を表白するを以て、適當なる祈禱と云ふ。

問　聰明なる人の高尚なる冀望は如何なるものなりや。

答　神の聖旨を枉ぐるに非ずして、彼の意思を以て神の聖旨を迎へ、以て神の聖旨の天地間に成就せん事を冀望するものにして、換言せば畢生の力を盡くし、以て天地の化育を贊くるに在り。

問　然らば、斯の如き祈禱は如何なる種類のものなりや。

答　是れ即ち最高尚なる祈禱にして、自己の全躰の欲望をも擧げて神慮に委ぬるものにして、聖旨の儘に成し給へと祈るが如き類なり。

問　神と人との交通とは如何なる事柄なりや。

答　人類天稟の理性により、神の仁愛を感じ、正義を歎び、眞に安心を得たる心靈の狀態を以て、神人の和合或は交通と云ふ、斯の如き場合は人間に在て其の最純、最良、最明、最智、最靈にして、且つ最も生活力の程度の高き時なるべし、此の際に在て、人は能く自他に有益にし

て且つ自他に幸福なる事物を明察するを得べし、故に「至誠如神」とは斯る狀態を指示せるものと知るべし。

問　正義の冀望は、祈禱のみにて滿足に表白し得べきものなりや。

答　此の冀望は之れを內界のみに潛伏せしむ可きものに非ず、必ずしも之れに適ふ處の動作を伴はざる可からず、是れ即ち勞働は祈禱たる由縁なり、故に人は善を行はんが爲めに其の精神と肉躰の全力を集注するを以て、圓滿具足の祈禱とは云ふなれ。

問　吾人自己を以て全く正善の指令に一任せる場合に在ては、如何なる狀態となるや。

答　斯の如き時に於て、神の力と愛とは吾人の裡に在て活働するを以て、何事として成らざるなし、所謂精神一到の場合にして、難事に接するも平然として遂げざれば止まじ。

問　然るに何を以て、世間善人の冀望が速かに達せらるゝ事なきや。

答　如何となれば、此の世界は法則の世界、約束の世界、秩序の世界、進歩の世界なるを以て、時間も亦其の約束の一にあり、而して惡人の慾望は淺近にして暫時に止るものなれば、隨て又暫時に達するを得べし、然れども善人の冀望は、即ち神の聖旨にして、遠大なり、大器晩成の法則に適合せるを以て、天國の地上に建設せらるゝは、即ち人界進化の極處に達せるの狀態なり、故に眼前に善者の冀望の達せられざるに依り、益々其の冀望の價値を推知せらるべし、聖誡に曰く『終り迄で耐へ忍ぶ者は幸福なり』と吾人は晩成の故を以て其の冀望を放拋せず、落膽せず、反て晩成は其の大器を自誇せりとして安心し樂で天の命を享けんとするものなり。

秩序と奇跡

問　外界即ち物質界の最大不可思議とは如何なるものなりや。

答　外界に在て、其の最大不可思議なる事實とは、即ち宇宙に秩序の整然たるの事實なり。

問　此の宇宙は自然の法則に準じて運行すと云ふは、宗教的に於て如何なる意味なりや。

答　天則即ち秩序なるものは神の間斷なき無限の聖旨の現象にして此の宇宙は即ち神の無盡なる善意の運動なりと云ふに同じ。

問　斯の如き自然界の秩序は、吾人に向て如何なる關係あるものなりや。

答　是れ吾人を益する至大なり、何となれば若し世界に秩序なかりせば、吾人何によりて此の世界に信認を確立するを得んや、此の秩序整然亂れずして始めて吾人が依て以て安心の基礎を定むるを得、故に此の秩序の亂れざるは即ち神の聖旨の亂れず、眞實なる事實を吾人に立證するものにして、之れに依り吾人は確實なる宗教的信仰の基礎を定む可きものなり。

問　天地間に遇然發現する事物の、新奇にして秩序なきが如き事實あるは如何。

答　吾人の新奇にして既定の秩序に相應ぜざる事物の發作は逐次研究の結果によりて、將來殫明せられ得可きものにして、今日迄で吾人の發見せしもの實に夥多あり、然れども古代の人類は斯る新事物に接する場合には、直ちに之れを異能、奇跡、休徵、奇瑞と呼び、或は之れに依りて神の震怒を表示するものなりとし、彼の北光の如き

問

は古昔希伯來人は神の奇瑞を人類に默示せるものとなし、支那に在ては今日猶ほ日蝕月蝕を以て鬼神の憤怒を皇帝の不德の上に漏すものとして、朝廷に嚴肅なる儀式を張て鬼神に謝するの制あり、惟ふに無文の人種は如此遇然の(遇然に非ざるも一見遇然の如きもの)事物を以て、普通一般の秩序を經ざる神の特別例外の行爲となし、隨て之れに異能、休徵、瑞祥の稱を加へたり、然るに今日の學者は斯の如き新奇なる事物にも、亦必らず秩序の整々たるものあるを知るが故に、單に新奇の事物のみならず、平生吾人の怪まざる事物と雖も、盡く靈妙不可思議を感ずべし、何となれば秩序は已でに大不可思議なる神の大聖旨の發動たるを以てなり、換言せば宇宙萬有は盡く神の聖旨を記述せる一大書籍館なればなり。

人間にして奇跡、異能を表はし得べきものあるや。

答

今日の社會に於ても、猶ほ如此奇跡異能は、或る宗教家には施行し得可きものなりと迷信せるの徒夥多あり、彼れ等は之れに依り凡俗の歸依を求むるの具となせり、故に今若し彼れ等の宗教より斯る奇跡談を撤去せば其の宗教は立處に倒碎するを免かれず、隨て凡俗の宗教に於ける奇跡談は、直ちに宗教の眞髓を形成せるものにして、或る「キリスト」教徒と雖も、今猶ほ奇跡論を辯護しキリストの奇跡談を以て歴史的事實なりとせるは、大なる誤謬なり、勿論古代に在て斯る奇跡談は、今日の如く俗間に流布せるは事實たりとするも、之れによりて奇跡其物も亦歴史的事實なりとするは、過信も亦甚だしからずや、何となれば目下或る劣等の宗教社會に在て奇跡を行ふ者ありと信ぜらるゝは、實際の事實なるが故に、奇跡其のものも亦事實なりとの結論に達す可くんば可なるべし、然らざ

れば吾人何を以て斯る古人の迷信を其の儘讓り受くるを得可けんや、現に教法歴史中の奇跡にしても、最初は舊約全書中の奇跡も盡く實際の事實とし、キリストの奇跡は勿論ペウロを始め、使徒等の奇跡より、羅馬教會の高僧等が行へりとする奇跡談も、盡く事實として信ぜられたり、然るに近代に至り、新教の勢力次第に旺盛となるに及んでや、羅馬教會の高僧等の奇跡は、最初新教徒の否定する處となり、聖書の批評的研究により舊約の奇跡談は否定せられ、終に使徒の奇跡談も今日之れが辯護を試むるものなきに至れり、然らば此の次は何人の奇跡を否定するの秋なりや、キリストの奇跡談は今や將に風前の燈火の如き境遇に接せり、然り而して今は只だ一種の比喩の如くに之れを解釋せりと雖も、惟ふに古代の聖書記錄者は必らず當時の社會に行はれたる信仰を其儘明記せし

問　ものたるを以て、恐くは單に比喩のみに非るべし、然れども當時の社會に行はれし迷信は以て直ちに實際の事實なりと云ふに至ては大に熟慮を要すべきものたるべし。

答　神は或る一定の時、一定の場處に於て、或る人々をして神の威力を現はさしめ、或は或る人にのみ神の大能力を注入し得べしとする信仰と、萬有は盡く常に神の秩序的意思に從ひ運行するものなりとする觀念と何れか勝れる理想なりや。

問　勿論乙は甲に比して遙かに高等なる理想と云はざる可からず、何となれば甲は神を以て偏頗なる者、我儘勝手なる者とすればなり、神は秩序の神、公平の神にして、義者不義者にも等しく雨露の恩澤を降し玉ふ世の實際の事實と相反すればなり。

死及び死後

問　人間の死とは何ぞや。

答　死とは人間肉躰の活動力即ち五官作用の休止を云ふ。

問　死とは人間の罪惡に對する神の罰則なりや。

答　死は生物界一般の通則にして、是れ恰も生物に出産の必要あると同時に、死の必要條件を伴ふものにして、敢て罪惡に對する天罰に非ざるべし、何となれば、無邪氣、無心なる彼の草木すら猶ほ枯死するの通則を免かるゝ事なし。

問　死は恐怖すべき害惡なりや。

答　否な、此の限りある地上に於て、限りなく生産の休止せざる間に於て、死の之れに伴ふ事なかりせば、反て大害を來すものなるべし、是

れ只だに人間のみならず、生物の發生するもの盡く死せざる時は數年を出でずして此の世界は自己の發生物を容るゝの場所なきに至るべし、故に造化は能く此の地上に生死の配合を調理せるものなり。

問　若し此の地上に適當なる生物の數を産し而して後産生と死去とを廢する時は、此の害を避くることを得べきものならずや。

答　然れ或は然らん、然れども如此するに當り一般の生物界の通則を變更し此の生物をして食はず寢ねず、增減せず、恰も死せる岩石の如くせざれば、以て生産と死去とを廢する能はざるべし、故に死去を廢せんが爲めに、必要上生産をも廢するは、結局此の世界をして死滅せしむると同然なり、是れ所謂『角を矯めんとして反て牛を殺す』の愚を演ずるものたるべし、加之限りある生物のみをして、此の

世に在らしめ、他をして生存の恩に浴するを拒むは、終に天父の慈心を制限して、有數の生物にのみ私せしむるに外ならず、惟ふに此の世界は、恰も或る大演劇場の如く、一日甲者群集して樂みを得れば、去りて次ぎに來らんとする乙者丙者をも、其快樂を享受するを得せしむると同樣にして、若し有限の坐敷をば同一の客の爲め日々買ひ占めらるゝ事あらば、終に他の者をして其の快樂に與るの機會無からしむべし、故に神は一視同仁の眼を以て、吾子蒼生を愛給ふが故に、其の愛子愛女等をして交る〴〵父の恩露に沾はしむるものと知るべきなり。

問　然るに何を以て世人は斯く死を忌み恐怖するや、

答　古代より人間社會に傳來せる未來世の恐懼心と、死は豫め病苦を伴ひ、且つ親戚故舊に離別せざる可からざるを以て、人情として之れを恐れ之れを忌むものなるべし、人は自己の未だ經驗せざる事物は常に忌み或は恐るゝものにして、後日之れを以て日用必須の物となすに至る事物と雖も、始めて社會に顯はれ、紹介せられたる事物に向ひ、人は頑固にも之に反抗を試むるものなり、就中人の死を恐怖するは、專ら彼の未來生の不安心なる妄想に基くもの多しとす、然れども何人と雖も、未だ經驗せざる未來世は、果して如此恐怖す可きものなりとも斷定する能はざるべし、何となれば吾人は生るゝも此の宇宙に於て仁慈なる天則の下に生活し死するも此の仁慈なる神の宇宙、神の天則の外に逸する能はざるものたらば、現世の生存は左迄に忌み怖る可きものに非る限り未來世も亦斯く恐るゝに足らざるべし、蓋し死に伴ふ病苦の如きは、單に吾人の智識未だ健全學の原理を究むるの拙なるが爲めにして、他日原の

此理に到達するを得ば、死は恰も吾人が日々の業務を終へ、毎夕快然として眠りに就くと一般、其の肉躰に於ても、精神に於ても、亦大に愉快なるものたるに至るべし、現に今日未だ健全學の理を辨ぜざるも、幸に生來强健にして思想の健全なる者の臨終に何の苦腦をも顯はさずして、永眠する者あるの一例は、是れ其の五躰と精神の疲勞を慰するが爲めに、安靜なる春宵の睡眠を得るに等しく、彼の親戚舊故と離別するが如きも亦暫時の間にして、之れを譬ふれば東京より西京へ一家の移住を爲す場合に當り、父兄が弟妹に先つて發足し、他の家族は各々家に留つて後事を始末し、順次發途の支度を爲すが如し、其の親戚故舊と雖も、必らず僅々たる百年以内に此の世を發足し、先人の後を追ふて往く者なれば、敢て死去を以て人生悲哀の極度とするは豈至當の見解と云ふ可けんや。

問　死は人生の終局なりや。

答　吾人の所見を以て簡短に之れを云へば、死とは將來の生命に移らんが爲めに吾人の心靈は此の肉躰を蟬脫するの謂にして、死は吾人の生命を缺隕するものに非ざるは、彼の毎夕の睡眠は吾人の生命を短縮せざるのみならず、反て日々の疲勞を慰し、毎朝更らに新たなる事業に就くの勇氣を回復し、益々活潑と熟練とを以て、次ぎの職務を成就すると同一にして、吾人は死の夕より更らに覺醒するの曉に於て、現生未完成の狀態を一洗し、遙かに勇壯活潑なる未來の世界に出產するものなりと信ず、如何となれば進化の理法は宇内の大則たる限りは、僅か人間の死の爲めに、進化の運命を阻礙し得可きものに非さるべし、換言せば、死は決して此の宇宙の大法を左右するの權威なきのみならず、死も亦之れに服從し、反て進歩

の運動を幇助すべき一個の方法たるに過ぎざるべし、果して然らば死は人生の終局と論ずるは、死を見る事重きに過ぎ、宇内の大法を蔑視するものと云ふべし。

問　死後人の心靈は天堂或は地獄と稱する境土に入るものなりや。

答　吾人は死後の狀態と、死後の住所とを詳論するを得ず、何となれば智識とは人間の確然たる經驗を云ふものにして、吾人死後の狀態は存生中に之れを試驗し或は經驗するを得ざるが故に、吾人は此の現社會に於て正義善道を樂み、俯仰天地に耻づる事なく心靈上安靜にして、滿足せるの狀態を以て天國となし、之れに反し、人にして苟も不正不善に與し、寸時と雖も心靈の安靜を得ず、廣き世界を狹く渡る者、即ち天地の間に躊躇する心靈の狀態を地獄と云ふに過ぎず、世人は動もすれば善人死せば天國に行き惡人死せば地獄に行くとして、之れを遠方に求め死後に非ざれば善者惡者の居所を定めざるが如しと、雖も、吾人反て之れを遠きに求めず、退て各自現在の心靈の狀態を觀察すれば、其の甲乙何れの位置にあるやを知るに難からずとす、故に人若し一善を思へば、已でに其の人は一歩天國の門に入り、一惡を行へば即時地獄の苦に迫らるゝものなりと信ず。

問　然らば人間終局の目的とは如何なるものなりや。

答　或る教法家は人間終局の目的を以て、未來永遠の快樂を恣にするを得べき、西方極樂淨土或は天國と名づくる特殊の場所の住民たる事なりとせり、然れども吾人は成るべく正義公道を學び、之れに適ふ生涯を現世に遂ぐるを以て人間終局の目的とす、何となれば正義に適ふ生涯は單に現世に於て適當なるのみならず、何時何處

に在ても亦人生に至當なる生活の道たりとの推測は、大に吾人の推理心を滿足せしむるを得可ければなり。

靈魂不滅

問　人は自覺的又意識的動物として、如何なる領内に屬すべきものなりや。

答　人は不可見的なる思想界、即ち靈界に屬すべき者なり。

問　外界即ち可見的物質界と、不可見的思想界との關係は如何なるものなりや。

答　外界の事物は盡く思想界即ち不可見的力の具躰的に現象するものにして、其關係は原因の結果に於ける、音響の樂器に於けるが如し。

問　人類は如何なる點に於て神の子女と稱す可きや。

答　神は無始無終の神靈にして、人は天より能く此の美性を稟くる者なるを以て、人類は神の同族即ち其の子女なりと云ふを得べし。

問　外界の事物は盡くる時ありや。

答　勢力と物質とは、何れも無始無終なる神の現象なれば、神と共に永久なるものなり。

問　此の宇宙間生命として現象するものゝ活動の傾向は何れの方面に向ひつゝありや。

答　生命活動の方向は、最も高尚なる生長に在り。

問　斯の如き成長は、如何なる道によりて發達するものなりや。

答　可見的外界の事物より不可見なる思想界の方向に向ひ、益々純真、

益々靈妙に進渉するものなり。

問　人間社會に立て最も高等なる發達の模範は如何なるものなりや。

答　耶蘇基督の如き釋尊の如き孔夫子の如き大賢索克拉底の如き、純良なる心靈的生活は、最も高等なる模範とするに足れり、此れ等の人々は皆な神の子女たるに適ふ善良なる生涯を遂げし者にして如此生涯を以て吾人は天國の生活と云ふ、而して此の生命は時と處と其の四圍の境遇に關るものに非ず、是れ即ち宇宙本來の傾向に適合するものなるを以て、又之れを普遍なる生命、無究の生命とも云ふを得べし。

問　吾人の安心即ち最も幸福なる自覺心は、如何なる際に於て發動するものなりや。

答　吾人の生命は神の無究なる生氣と、永遠に相調合融合するものなりと自覺せし場合に在て、始めて安心即ち最大の幸福を感じ得るものなり。

問　人は如此最大なる幸福、即ち安心を得たる際に於ても猶ほ肉躰の疾苦或は死亡を恐怖するものなりや。

答　否な、斯る場合に於て、人の心靈は肉躰上の疾苦或は死亡を征服し、既でに此れ等の事物より超過せしものにして、彼の古來正義を把持して動かず、身命を火中に投ぜらるゝも泰然として恐るゝ事なく、死を見る事恰も歸するが如き者の存生せし事實は過去の歴史が已でに吾人に立證せり、彼の索克拉底が寃罪の爲めに死刑の宣告を受けしを聞き、其の門人は金を醵して彼れの罪を購はんとせし時、索氏斷乎として之れを退けて曰く『我れ罪なくして死に定められる故に、金を以て償ふ可きを罪なきを如何せん』と後ち刑の執行

の日に當り平然として不法なる法官の與ふる毒杯を擧げ、安然瞑ぬるが如くにして未來の國に誕生せしは實に死を征服併呑せし行爲と云ふを得べし、斯る生命を以て吾人は眞に不死、無死の生命と稱するを得べし。

問　之れに反して、人の生命は現在に於ても不可見的にして幽靈の如きものなれば、其の終局は全く虛無滅亡に歸するものなりとの想像は、果して道理あるものなりや。

答　否な、吾輩は之れを以て合理的想像と云ふを得ず、何となれば此の宇宙間に顯現する勢力は、譬ひ一つ細微分子の間に於けるものと雖も、一として虛無に消散し終るものに非ず、況や人の心靈は宇宙の現象中其の最高等なるものたるに於てをや、加ふるに其最も劣等なるものと雖も順次皆高等なるものゝ方向に昇進しつゝある事實は、此の美妙なる天地運行の結果にして、此れ皆盡く、否な一毫と雖も皆空に終るべしと想像するは、殆んと背理の頂點と云はざる可からず。

問　然らば如何なる解釋を思想界及び秩序的世界に向て附するは合理的なりや。

答　之れを解釋するに積極的即ち生命を以て解釋するを必要とし、反て消極的即ち死滅を以て解釋するは、吾人が宇宙なる命題に向て與ふる答案に非ざるべし。

問　現世に在て其の最も高尚なる生命の冀望を達せんとせば、如何なる行爲を以て必要とするや。

答　吾人は現世に於て心靈の健全を保たんが爲め、茲に唯一屈强の要素あり、是れ即ち利己心に代ふるに利他心即ち他愛心を養成する

に在り。

問　若し靈魂不滅の冀望は、吾人今日の狀態に於て之れを實現する能はざるものとせば、靈魂滅亡を立證すべき合理的論證ありや。

答　否な、之れあるなし、抑も靈魂不滅の道理を人間目下の智識の程度に於て之れを實現する能はざると同時に、靈魂滅亡の論證も亦之れを證明する能はざるなり、蓋し此れ等は實に未來の事物に關する問題にして、何人と雖も明らかに論理的立證を擧示するに難かるべし、然るに此の宏大なる靈魂不滅の冀望は、反て能く神聖なる宇宙の概念と一致契合するものなれば、比較的に靈魂不滅の論證は確實なりと云ふを得べし。

問　合理的と不合理的との思想は、何によりて試驗し得るものなりや。

答　若し或る一つの思想にして、他の合理的思想と容易に相一致契合し、何人に於ても之れを理解し得可き時は、始めて眞理の試驗に合格せしものにして、若し或思想が他の合理的思想と衝突し、相容れざる時は、是れ即ち不合理なる迷想とす可きものなり。

福音

問　人心の根底に於て、常に叫ぶ處の願望は如何なるものなりや。

答　人は此の天地間森羅萬象の由來根原を温ね、之れを支配する力即ち神は如何なる目的を以て人類をして此の地上に生産せしむるものなりや、或は神は果して人類を愛撫する者なりや、或は人間の如何なる行爲は神の鴻恩に報ゆるに足る可きや、或は此の人間社會終局の目的は、果して如何なるものなりやとの諸問題に向て、確乎

たる答案、即ち確固たる智識を得以て安心せん事を冀望する者なり。

問　何を以て人は此れ等の智識を得ざれば安心する事能はざるや。

答　人若し此れ等の智識を得れば、之れに適應する自己の行動を勵み、以て天意に從順ならん事を企望す、如何となれば吾人は天意に順へば榮へ、之れに逆へば滅亡するものなりと自覺するを以てなり、故に人の天則と其の目的を知らん事を企望するは自ら護るの精神より出でしものにして、蓋し或る意味に於て苦を去り樂を需むる人心自然の傾向なり。

問　如何なる方法によりて、此れ等の智識を得べきものなりや、

答　吾人は思想、即ち推理心に訴へて此れ等の事物を知悉せんと欲す、而して吾人の推理心は終に此の宇宙の大目的は正善にして、神は

即ち慈愛の神なるを知る、故に吾人の行爲は正善慈愛に適合すべきものたらざる可からず、隨て萬有は盡く不完全より完全、即ち劣等の善より高等の善に進渉すべきものたるを知れり。

問　善と惡とは何れか優勝者なりや。

答　吾人注意して世間の實相を看來れば、惡は常に最後の勝を善に讓りつゝあるの事實を看破するを得べし、故に善は又其の反對なる惡をも化して能く利用する優勢力を有するものたるを知るに難からざるべし。

問　善の惡に勝ちし著名の事實ありや。

答　善の終に惡を征服せし例證は古來一々枚擧するに遑まあらざるべし、彼の四聖人の傳記を見るも其他忠臣義士の性行中實に顯然として此の事實を證明せるは何人と雖も既でに熟知せるものな

るべし。

問　福音とは如何なるものを云ふや。

答　福なる音信とは、即ち此の世界にて善は必らず悪に優に勝ち得可きものたるを保證せる實例を訓示するものにして、未熟の人を奬勵して成熟醒覺の機會を與ふるのみならず、醒覺者をして益々完全ならしむるものにして、是れ恰も滋養食物或は強壯劑の如し、飢餓の人は之れに依りて健康を回復し健康者は之れを用ゐて益々其の氣力を旺盛ならしむるを得べし。

問　如何なる福音は、人間社會に最も有力なるものなりや。

答　吾人茲に新たなる福音、即ち天則を宣言す、即ち『萬民は盡く神の愛見たる事、』隨て一家一族、鄕黨朋友より各國民の協和一致は、此の人間社會に安寧幸福を增進する最上方法たりと敎訓する者は、眞の天使にして、眞の福音を傳ふるものたるなり。

斯る幸福なる社會觀は、人生に如何なる裨益を與ふるものなりや。

答　斯の如き社會觀は、吾人の心靈に眞誠確固なる安心、滿足、歡喜及び高尙なる冀望、即ち顯然なる樂天主義を與ふるものにして、現今人心の傾向は多々益々此の社會觀に向て流注しつゝあるを見るべし。

○道德

道德に就て

問　人の高尙なる能力とは、如何なるものなりや。

答　人の高尚なる能力とは善惡を識別するの力を云ふ。

問　人の高尚なる德性とは如何なるものなりや。

答　人は惡を忌み、善を愛するの特性あり、之れに依りて人は高尚なる被造物、即ち萬物の靈長たるを得べし。

問　惡人は善を愛するものなりや。

答　惡人と雖も、亦必らず、しも之れを敬愛せざるには非ざるべし、然れども其の惡者たる由緣は其の智慮高尚ならざるが爲め、時として取捨撰擇を誤り、又時としては目前自己の利益强て之れを云へば消極的善を取り、反て遠大の積極的善を失ふものと云べし。

問　人の德性に關する事物の學問を何と名つくるや。

答　之れを倫理學と云ふ。

問　倫理學とは如何なるものなりや。

答　倫理學とは、人間の意思自由の能力の範圍內に於て、善惡に關する諸法則の關係を正當に整理し、詳細に解釋するの學問なり換言せば人と人との間に起れる道德的關係を正當に整理解釋する處の學問なり。

問　人の德性は何處より來りしものなりや。

答　或る論者は人の德性を以て、單純なる感覺及び劣等なる實利の慾情より自然に陶汰せられて發生せしものゝ如く論ぜりと雖も、吾輩は之れを以て人間固有の道德原子より發生せるものなりとし、決して純然たる不道德、即ち私慾的感覺より發生せりと爲す能はざるなり。蓋し人類の道德的概念は、其の本源に於て確乎たる潛勢力なくんばある可からず、彼の進化說を以て之れを論ずるも、道德の萌芽は(成果には非ず)は少くも先天的に存在せるものならざる可

からず、何となれば人類の道德心にして自然陶汰により、善を撰擇保存したる事、諸他の能力の如くならしむるものとせば、必然的に善なるものは、其の撰擇以前に於て業に既に成立したりしものならずんば、自然陶汰を適用すべき主物なきを如何せん、況や造化は如何に巧妙なるも無より有を作爲し、或は進化せしむるを得べしとは進化論者と雖も許諾する能はざるものたるに於ておや。

問　何故に正義眞實の云爲は、不正虛僞の云爲よりも名譽なりや。

答　人若し正義を行ひ眞實を語りて、他人より義とせられず、又信ぜられざるも、意中自ら欣々の情止み難し、然れども不正を行ひ、虛僞を以て人を瞞着して、人の知らずして己れを義とし或は信ずるも自ら其の不正不義たる事を知覺するものなるが故に意中反て快々慚愧の情に耐へざるべし、惟ふに自己の道德的本質が明暗に論なく、自己を照鑑し、他人に先つて自己の言行に對し既でに賞罰を加ふるものなるに依れり。

問　如何なる行爲を以て高尙なる品行、即ち德行と爲すを得べきや。

答　高尙なる品行とは、如何なる場合に在ても、其心の撰定せる目的の上に善意、愛心の智識的應用を云ふ。故に同一の愛心にして甲の場合に在ては、勇氣を意味し、乙の場合に在ては謙遜を意味するものなり。

問　遇然の出來事の爲めに起れる行爲は、善惡を以て論じ得べきものなりや。

答　人の行爲にして、眞に其の意思より發せざる時は、道德上善惡の標準を以て律すべからず、何となれば是れ過失にして德行或は罪惡に非ず、夫れ德行とは其の結果の善惡に論なく、其の人の正當なる

目的を以て、正當なる方法の應用上に加ふる名稱なり。譬へば茲に富者ありて、其の別莊を建築せんが爲めに或る山水眺望の好き地を高價にて買入れたり、然るに遇然にも此の地は或る貧民の所有地たりしを以て、之れが爲め貧民の愁眉を開かしめたりとせんか、如此場合に於て貧民を賑かしたるは、彼の慈善家が少許の資を育兒院又は盲啞院に喜捨せると同一の贊詞を加ふ可からざるや明らかなり。

問　高尚なる道德的關係は快、不快の念慮より起る可きものなりや。

答　吾人は快、不快の念慮より起ずる處の行爲を以て、正當なる道德的行爲となすを得ず、彼の犬を愛する主人は、其の飼犬を飼養するに丁寧親切を以てし、或は肉片菓子等を與へて種々なる技藝を敎へたる場合に於て、犬は能く主人の命に從ひ、種々なる技藝を演じ、以て主人の勞に酬ゆべし。然れども犬に在ては單に快、不快と恐懼の念慮に束縛せられて演藝するものなれば、茲には意思の自由なく、只だ犬の生理的饑餓の力を適用し、恐怖と慾望とに依りて其の行爲を變ぜしめたるに過ぎざれば、以て正當なる德行と云ふを得ず。故に人間社會の制裁又は法律あるが爲めに惡事を爲さざる者は、以て道德家と云ふを得ざるや明らかなり。

問　何を以て恐怖心、快、不快心より發する行爲を德行とする能はざるや。

答　何となれば是れ即ち利害の舞臺にして義務の舞臺に非ず。而して義務の概念は即ち個人と個人との間に起れる處の關係にして此の概念は道德の本質なるを以て之れを缺く時は道德の成立し得可きものに非ず、抑も個人と個人との關係とは外形の行爲のみに

非ずして内界の思想、或は感情の相伴ふものたるを要す、換言せば、善悪撰擇の自由を有する心靈と心靈との關係なり政に恐怖心、快、不快の念は動物的或は奴隷的服從の念と同一にして、撰擇の自由茲に存せず、單に機械的盲動にして、斯る盲動は、決して道德法の下にある可きものに非ず、自然法の下にある可きは當然なり、思ふに『斯くあらざる可からず』と『斯くあり』との學問の區別なれば、全然道德論と其の範圍を異にせるものたるや明らかなり。

問　人其の德行を修めんとするには、如何なる方法に據るべきものなりや。

答　德行を修養せんとする者は、先づ其心の撰擇せる方向に向て進むべきものなり、蓋し其心の撰擇は、決して自己の利、不利を論ぜざるものにして、隨て其の撰擇は常に正當なり。

問　德行の源泉は如何なるものなりや。

答　德行は正善、即ち愛心より發源するものなるを以て、德行ある人は決して其の隣人を妨害せず、又虚僞の言行なく、常に天下の公益を圖る『人を愛する己れを愛するが如くす』るを云ふ。

問　愛心ある者は既でに正當なる德行を成就し得るものなりや。

答　愛心は即ち德行の根元たるも、之れを耕すに智識を以てせざれば、其の目的の正當なるに係らず、時として過失に陷る事少なしとせず。

問　然らば德行の根元は實に薄弱なるものにして、德行必らずしも善其の結果を生ぜずとせば、德行は實に危險なるものに非ざるや。

答　道德學は即ち結果の學問に非ずして、意思と之れに伴ふ行爲の學問なり。故に不幸にして其の結果の善其ならざる事ありとするも、

亦敢て咎むべきものに非ざるべし、譬へば茲に貧窮なる少女あり彼れは病に罹れる母を介抱するに、其の家の貧なるが爲め、小女は自ら己れの飲食を忘れ二六時中殆んど勞働と母の看護とに費したるも、不幸にして母が治癒の効を奏せざるのみならず、自らも亦疲勞と衰弱の爲めに死せり。又或る人は其の親の病を癒さんが爲め、所謂貧窮の盜をなしたる者なりしが、幸にして其の目的とせる親の病は癒ゆるを得たり、扨て右の兩者は何れも其の目的に於ては等しく父母の疾病を醫するに在りて、甲は其目的を達するを得ずして倒れ、乙は之れを達したり、然れども其の撰びし處の方法は甲に在ては自ら節制し終に死に至るも素行を變せずと雖も、乙に在ては不正の盜賊なり、斯の如き場合に於て此の乙者を認めて公明正大なる德行とする者なきのみならず、誰れか結果不幸の甲女の爲めに同情一掬の涙なきを得んや、要するに其の結果如何に關らず、甲女の行爲は即ち德行の標準に合ふが爲めならずして何ぞや、故に道德學は結果を論ずるものに非ずして、其の意思と方法とを論ずるものなるを知るに難からず、蓋し正當なる道德上の判斷は人を判斷するの謂にして、行はれたる物を判斷するに非ず、隨て其の行爲の結果は人に快樂を與ふると、苦痛を與ふるとに關せざるものたるを知るべきなり。

問　人の良心、即ち純潔なる心靈は快、不快の念慮に抑制せらるゝものなりや。

答　人の良心は決して快不快或は毀譽褒貶に遁着なく自己の撰擇せる一方向に直進し反て通例人の不快と感ずる事物を以て快樂となせるが如き觀なしとせず、現に『有名なる實利論者ヂョ、ス、チュ

アート、ミル氏が「今若し余をして自ら善人と認めざる某人を強て善人なりと呼ばしめんとし、若し然らざれば――爾を驅て未來永劫の地獄に墮落せしむ可し――と云ふ者ありとせば、余は斯の如き人々の所謂天國に昇らんよりは、反て地獄に墮落するを擇ぶべし」と云ひ、又教授ハックスレー氏も快樂說を主張するに關らず「今假りに神學は邪惡なる神の存在を立證し、隨て社會の宗教的信仰は道德上の理想を捨て、斯る邪惡なる神を取らんか、余は斷じて之れに與せざるのみならず、人類が邪惡を崇拜し――邪惡よ汝は我が神たれ――とて之れを信仰し、以て人類の永生を貪らんより余は寧ろ人類と共に斯る邪神の爲めに速く滅せらるゝを以て進かに勝れりと思惟す」と云へり『(Bixby's Crisis of Morals.) 蓋し人の正義に忠實なるは僅かに快、不快或は世間の毀譽褒貶に比すべきものに非ず、人類の全滅を賭するも猶ほ正義に忠實なる心靈の號叫を、斯くの如く實利主義の人々の口より漏洩せしめたるものに非ずして何ぞや。故に道德的理想なるものは、實に神聖不可侵的心靈の號叫にして、明らかに利、不利或は既に苦樂の計算以上に超然たるや智者を俟たずして明白なり。

問　德行は如何なる方法に依りて學ぶを得可きや。

答　德行を修むるに最も適當、最も簡便なる方法は、古今東西に其の名を知られ、恰も芙蓉峰頭の俗塵を脫して四時秀麗なるが如き、有德圓滿なる人々の性行に鑑み、之れが感化を受くるに在り、何となれば斯る行爲は高尙優美にして人間社會の欣慕すべき最上の感化力なればなり、換言せば是れ所謂神の聖き性質が人間の性狀に反映するものなり。

良心

問　良心とは如何なるものなりや。

答　客觀的に之れを見れは吾人々類をして正義を行はしめんが爲め、常に吾人に諫爭する處の一勢力なり、故に信仰上の詞を以て之れを云へは、即ち上帝の人類に賜はれる神勅にして是れ恰も外界の物質間に行はるゝ引力の如く、人の內界に行はるゝ一種の厭力たり。然れども主觀的に之れを見れは、即ち人性固有の道義心にして、左に四種の定義を列擧し、以て良心の主義を理解するの便に供せん。

一　道德心、換言せは嚴肅なる善惡を區別する知感、及ひ高尙なる精神的動念と、賤劣なる禽獸的動念との嚴肅なる區別の知感、

二　正善を行ひ邪惡を避け、劣等なる動念を去て高等なる動念を取るは、人たる者の義務なりとの感情。

三　吾人の意識は反省によりて、高等及ひ劣等の動念中、其の何れを嘉賞すべきやを比較し、從て孰れを高等となし、孰れを劣等となし、將た其の孰れを採擇すべきやを觀察し、其の撰擇は果して道德的智識に背かさるや否や、其の撰擇の結果たる行爲は道德的理想に一致すべきや否やを了知する所の心證、若しくは自認の活動力。

四　行爲の判定者、即ち道德的認識の嘉賞する處となり、又道德的意思の決行せんとする處を外部に表現すべき、適當の行爲を、吾人に指定する處の判斷力(Crisis of morals.)

問　人若し惡事を行ひ時に際し意中自ら安からさるは果して如何な

る所以なりや。

答　斯る場合に於て、人は神の聖旨に逆ひ、内界の厭力に抵抗し、自ら精神界の法則外に逸脱せるを以てなり。是れ即ち廉恥の感覺にして、恰も衆人の面前に於て、其の衣類を剝脱せられたると同種類の感を起すものたるなり。

問　人は常に良心の平和を得んとするには、如何にせば可なるものなりや。

答　良心の不安にして平靜ならざるは、即ち其の軌道を脱奔せるを自證するものたるを以て、直ちに普遍的善意即ち上帝の聖旨の範圍内に歸るべし、斯くの如くする時は、直ちに良心の平和を回復し得可きものにして、人は常に此の範圍内に良心を安置する事を勉むべし、惟ふに孟軻氏の放心を求むるの謂ならんか。

問　時代により正義の觀念に差異なきものなりや。

答　人は經驗を積みて漸次智識の容量を增加するに從ひ、正義の觀念も逐次高等に進化するものにして、人の良心も亦常に吾人を驅て倘ほ高等なる正義の道に昇進せしむるものなり、故に今日の人間は往古ダビデ王或はユリセスの時代に於て想像せし正義よりも、遙かに高倘なる正義を要求する者たるは論を俟たざるなり。

問　良心の發動は時と人とに依りて、一定せさるが如き觀あるは、果して如何なる理由ぞ。

答　人の良心は時により、又人に依りて、普遍的善意(上帝の聖旨)の厭力を感ずる程度に差異あるは、恰も磁石針が其の位置の異なると感動力の強弱とに依りて地心磁力の感應を受くるの程度に差異を生じ、所謂磁針の變差を生じ、或は感動の鋭鈍を生ずるが如し。故に

人も亦其の周圍の境遇の差異によりて得たる智識の程度の差異に依り、良心の發動に利鈍あるは至當なる事實たり。

問　何をか健全なる良心と云ふや。

答　心靈の善良なる感覺を健全なる良心と云ふ。

問　何をか病的の良心と云ふや。

答　正義を遂行せんとする冀望よりも、單に惡行を恐れ避くるの情切なるが如きものを、病的の良心と云ふ、是れ必竟卑屈なる自愛心にして、寧ろ利己心と云ふを以て適當とせん。故に人は惡を爲さゞりしのみに依りて善人たりと云ふを得ず、必らずしも惡を畏怖するなく、進んで善を遂行せんとするの冀望ありて後ち、始めて健全なる良心たるを得べし。

問　何をか偉大なる良心と云ふや。

答　神の聖旨の協力者となり、宇宙に最大善意の成果を擧げんが爲め、自己の意思を以て神前に供奉するを至樂とする處の、人の良心を吾人は偉大なる良心と云ふ、何となれば斯の良心に非されば、以て神勅たるの効用と威嚴とを缺乏し、隨て偉大なる德を此の世に成就する能はざるを以てなり。

義務

問　何をか義務と云ふや。

答　義務とは、各人の必らず正當に負擔す可き責任にして、其の何人たるを論ぜず、總べて自己の權利を保全せんと欲せば必然的に義務の觀念に到達するものなり。

問　義務の觀念は何處より來れるものなりや。

答　義務の觀念は、即ち人間の自衛的本能、即ち權利の感覺と相俟て發するものにして、彼の直線は必らず其の兩端を有するの必要ある、が如く、權利の存在は論理上義務の存在を認定し、始めて全きものたるを得べし、何となれば人にして自己に權利あるを知らば、須らく自己の爲めに此の權利を保存すべき義務あり、隨て他人をして自己の權利を尊敬せしめ、自らも亦他人の權利を侵害せざるの義務、双方の間に生ずべし、換言せば己れの權利を主張せんとせば、他人の權利に對する相當の義務も亦必然の結果として是認せざる可からざるものなるが故に、義務の觀念とは、人々自衛の本能を擴張せられたる結果なりと知るべし。

問　何をか權利と云ふや。

答　自然界の事物は暫く措て問はざるも、人間社會に於て之れを云へば、自己の概念の發すると同時に自己の存在權を有して此の世界に存在するものたるを認識し、隨て自ら衛りて其永續を保護す可き權利を有す、是れ單に人間社會のみに於て認めらるゝものに非ずして、一般の動物界に在ても明らかに其の權利認識の徵章を發見するに難からず、鳥類が其の巢の所有權を爭ひ、犬豚が己れの食器中の食餌をば、他の鳥獸にして之れを奪はんとせば、決死の爭鬪を以て之れを守らんとするが如きは、即人間社會に所謂財產所有權を爭ふものにして、惟ふに財產なるものは人間に於ては勿論、就中下等動物の食餌の如きは、直接に自己の存在を永續するに當りて其の最も必要物件たればなり。

問　義務を盡すとは如何なるものなりや。

答　義務を盡すとは、人の認めて以て正當なりとする處を利害に論なく決行するを云ふ。

問　正當なる事物とは如何なるものなりや。

答　正當なる事物とは正義に適へる事物にして、心靈の認めて以て正理公道なりとする事物の標準を云ふ。

問　人の正當なりとするものは、常に不變にして同一なるものなりや、

答　正義の概念は、即ち人間の眞善美の觀念を總合せる抽象的概念にして、此の概念を世の實際の事物の上に應用せる斷案は、時と場合に於て甚だしき差異を生ずるものにして、宗教上の事物に就て一例を擧ぐれば、現に羅馬教會に在て、教會の意旨を以て宗教的事物一切の標準とし、反抗者(新教徒)は其の名の如く、全く此の定義に反抗し、聖書を以て信仰の標準とし、唯一教徒の如きは反て各個人の

良心の斷案を以て、各個人の信仰の標準とするか如し、蓋し人間社會の事情は極めて複雜なるものにして、人々周圍の境遇と、教育の方法と、文化の程度、祖宗の遺風等の差異によりて、如此正當とする事物の認定法に相違を生ずべきものたるべし。

問　然らば此の複雜なる人間社會に於て、眞に正當と認むるものを確定す可からざるや。

答　吾人は必らずしも之れを確定するに難からざるべしと信ず、何となれば羅馬教會に於て教會の意旨を以て、宗教的信仰の標準と定め、反抗者(新教徒)は聖書或は各宗の信仰ケ條を定めたるは、究竟各々自ら之れが果して正當なりと認定せるものを以て標準となせるに外ならず、現に教會の意思にあれ、聖書にあれ、信仰ケ條にあれ、其の當時之れを撰定せし人々の良心は、是れ確かに正當なる標準

なりとて、認定せしが故に、今日に於て一種の標準として繼續せるものなれは、要するに古人は各個人の良心の斷案を以て信仰の標準と定めたるものにして、今人も亦古人に擬ひ、以て各個人の標準を定む可き權利あるは勿論にして、此の權利を以て神は古人にのみ私するものなりとするを得可べけんや。

問　然らは如何なるものを以て、人々の義務として正當に盡さゝる可からざるものなりや。

答　吾輩の良心は、人類一般の安寧幸福の量を增進するを以て、各個人の正當なる任務なりとす、故に只だ自己のみを益するも、害を他人に及ぼすの恐れあるものは、以て正當なる任務と云ふを得ざるべし、故に彼の罪惡邪行の如きは、人類一般の安寧と幸福の量を減ずるものたるを以て、全然之れを不正不義として排斥せざるを得ざるなり。

問　正義は常に同一なりや。

答　正義其のものは固より抽象的の概念にして、終始變化すべきものに非ずと雖も、之れを實際の事物の上に適用して、事物の正邪を判別するに當り、人智の高低により、往々世間に在て正邪顚倒の誤謬なしとせず、惟ふに同一の事物にして、時としては正たるが如く時としては又邪たるが如き場合少しとせず、要するに其の關係者に甲乙あるが爲め正邪を顚倒せざる可からざるが如き事實あるを以て、實際の應用上に在ては事々物々に觸れて智識と良心の訓諭を仰がざる可からず、然りと雖も又茲に最も困難なるは、世界の事物は單に自己又は人間の爲めのみに成れるものに非ざれば、或る場合に於て有限の人智は此の無限の事物を、盡く正邪の下に判別

す可からざるや知る可きなり。

問　人は何によりて實際事物の正邪を判別するものなりや。

答　人の正邪を實際上に於て區別するは、即ち其の經驗に依り智識の斷案を俟つものにして、恰も人が滋養物と毒藥とを區別するが如し。

問　正義は宗教的に之れを何と名つく可きや。

答　正義とは神の聖旨にして永遠無究なり。又正義に服從するは人生の常則に服するものにして、人若し之れに逆へば倒れ、之れに從へば興る可きものなり。

問　吾人は他人に對し正義を行はざる可からざる任務ありや。

答　吾人は他人に對して正義を行ふ可き義務を有す、何となれば、吾人は他人を苦しむるの權利を有せざるが故なり。

問　吾人は自己に對して正義を行はざる可からざるの任務ありや。

答　然り、何となれば人若し不正を行ひ、之れが爲め幸にして他人を害する能はざりしとするも、亦必らず自己を害する大なるを恐るればなり。

惡の說

問　人は如何なる事物の上に惡なる名稱を加ふるものなりや。

答　惡とは簡短に云へば、大凡吾人々類生活の安寧幸福を阻害する處の事物の上に加へたる名詞にして、時としては、或る有益なる事物と雖も、未だ人に依りて其の効用を發見せられざる場合に於ては又之れを惡と呼びなせり。

問　古來惡なる者の普通一般の解釋如何。

答　古來泰西諸國に於て、惡事の世に存在するは、必ず惡魔なる者の存在に歸し、此の者は神怒の下に未來永劫の罪科を擔ひ、人間界に出現し、以て人を邪惡に誘惑する者なりとせり。

問　古來人間の惡なりとせしものゝ上に於ける新思想は如何。

答　吾人は今や多少颶風雷電等の用と原因とを理解し、更らに進んで噴火山、地震等は此の地球の製作上必要なる一事物なるの理を窺ひ知るを得しを以て、如此古人が大惡魔の作用なりと誤認せし事物と雖も、已に惡魔の作用に非ずして、此の神聖なる宇宙を開導する神意の發現に外ならず、隨て此の神聖なる宇宙間最早惡魔の存在すべき餘地なきに至れり。

問　何故に吾人の思想中此の宇宙間已でに眞の惡魔の存在を認むるか。

答　如何となれば惡とは有害無益なるもの、惡意なるもの、隨て不整頓にして秩序なきもの、混雜紛亂せる者の謂にして、如何で此の神聖なる善意の宇宙、秩序的世界、美と仁との天地間に斯る邪惡の存在は、人間思想界の法則として認定す可からざる事實なり。

問　然らば、所謂惡なるものは、果して如何なるものなりや。

答　惡とは單に比較的即ち物と物と相對の上に名づけたる假稱にして彼の庭園に生ずる雜草の如きも決して惡しきものに非ず。反て天然に美の眞境を寫せるものたりと雖も、只だ吾人の庭園に於て他の雜草の繁茂を欲せざるにより、吁！あしき雜草よ！と思想するに過ぎず、然らば雜草の惡しと云ふは、只だ庭園との關係上惡敷ものにして、雜草天然の性狀より論ずれば、敢て惡ならざるのみなる可からざるや。

らず、此の雜草は野外の山水を彩色する、最美最妙なる善きものたるを知るべきなり。

問　苦痛の如きものと雖も悪ならずとし得べき論證ありや。

答　然り、饑餓は人の最も感ずる苦痛の一なるべし、然れども是れ決して悪ならず、何となれば饑餓は人の貴重なる生命を繋ぐべき最緊要事件なればなり、不安心と危險とは人の苦痛とする處なり、然れども是れ人を驅て家屋を造作し、家業を勵み、文明開化に進ましむるの要具たるを忘る可からず。

問　人若し全く苦痛、困難を知らざる者なれば、茲に快樂の何物たるを理解し之れを樂む事を行得可きや。

答　人の苦痛を感ずるは、是れ生々活潑なるの證にして、苦痛を感ぜざるものは死塊に等し、況んや人の智識は比較的に得可きものにして、苦痛なき世界には快樂の何たるを解するの道なかるべし、吾人は反て苦痛を以て進歩の真教師とす、蓋し苦痛の何たるを理解せば、苦痛何ぞ厭ふ可きものならんや。

問　死は果して悪ならざるや。

答　若し前陳の如く、此の宇宙は眞に善意の宇宙なれば、死何ぞ悪たるを得んや、是れ必ず人生進歩の一段落に過ぎざるべし、死は決して人事の終局に非ず、是れ只だ物質的進渉に過ぎざるなり、善人何ぞ肉躰の死の爲めに其の生命を害せらる可けんや、肉躰の死は永生に至るの第二の門戸なり、死は恰も安眠の如く、肉躰の疲勞せし時に於て發る肉躰上の一現象なり、故に人は寢るも其生命は滅ぶるものに非ず、夫れ死とは肉躰上の變化なり、肉躰上の生活とは新陳代謝を云ふ、換言せば生活せる肉躰は毎日其の舊分子として死滅

し去らしめ食物呼吸等によりて、外界より得たる新分子と相交替するを云ひ、肉躰の此の作用を中止するを死と名く、然らば死とは全然物質界の狀態にして、精神界即ち心靈界の狀態に非るべし、故に人と云へる名詞は此の物質なる肉躰の上に名けられたる名稱なりとせば、死は人の最終局たるが如しと雖も猶ほ更らに進んで之れを考察せば、新陳代謝の作用を中止せし物質は、是れと同時に他の方面に向て其の勢力を逞ふするを見るべし、是れ腐敗なり、分解作用なり、此の作用に依りて物質は本來の位置に復歸し、再び他の線に觸るゝを俟たん、然らば肉躰なる物質は人の形躰の上に死せりとするも、物質の力は決して是れと同時に死滅するものに非ざるべし、況や人の人たる本質、其の思想、其の靈魂は之れと共に消長するものに非ざるに於てをや。故に死は人の人たる本質に向て損害するものに非ざれば、吾人は之れを以て惡事なり、凶事なりと擯斥すべきものに非ざるを知れり。

問　人は何故に生活を企望するや。

答　人は此の世の生活によりて、神の聖旨に奉仕し、或は其の善意を發現せんと欲するを以てなり。

問　然らば、死は其の企望に反するものなりや。

答　吾人は生死に論なく、萬有は盡く神の聖旨即ち善意に奉仕せざる可からず、故に人は死するも猶ほ神の聖旨の下に在て奉仕す可きものなり。

問　死の恐怖を超へて、如何に高尚なる企望は善人の眼中に在りや。

答　善は宇宙間の最大最高權威なり、故に善人は此の最高權威を掌握するを以て、所謂天下に敵なきの人なり、胡ぞ肉の死亡を恐怖せん、

反て次に來らんとする世に在て大に其の壯圖を成就せんとするの大企望を有す。

問　人は何故此の世界に在て苦痛なくして安樂を得、價なくして快樂を得、死なくして生を得る能はざるや。

答　人は世界の一員として、又人として此の世界に存在する限りは、此の世界の大法に順從すべき義務を有す、是れ人の人たり、世界の一員たるの權利と相伴ふものなり、此の世界は成長すべき世界なるを以て、人も亦其の一員として成長せざる可からず、故に人は新たなる世界、又は人間の狀態に應じて、間斷なく、新陳代謝の作用を營翼せざる可からず、是れ吾人に苦痛と死の價を要求する所以なり。

問　然らば、成長と苦痛は離る可からざるものなりや。

答　然り、苦痛不滿足は快樂、滿足の成長に欠く可からざる必然的要素にして、人は之れに依て、其の成長力を興奮せしむるを得べきものなり。

問　所謂惡とは簡短に之れを譬ふれは如何なるものなりや。

答　惡とは或る文章中に在る處の章句、訓點、記標の如きものなり、若し其の文章中、更らに章句訓點記標なかりせは、只た文字を多く集積せしのみにして、直ちに其の意を解する事能はざるべし、然れども、斯の如き記標あるによりて、一目了然たる明文となり、合理的文章となるものなり、然り、而して此の記標は、決して文章にも非ず、意味にも非ず、只た文章をして明了たらしむるの具たるに過ぎざるなり、死苦の如きも亦然り、只た人生なる大文章の上に一種の訓點記標として見る可きものなるが故に吾人は又之れに依りて人生の上に一層の妙味を理解するを得るものなり。

問　然らば人生の法則とは如何なるものなりや。

答　是れ恰も音律法の緩急、高低、休止等に依りて、美妙の音調を作すが如く、人生に於ても光明と暗黑、饑餓と滿足、勞働と休息、苦痛と快樂、悲愛と仁愛等の綜錯して以て美妙の人生を形成せるが如し。

問　神は人類の心靈に對て、如何なる訓令を與ふるものなりや。

答　曰く「成長すべし」とは神の人類に下せる訓令なり、故に決して休止すべからざるものなり。

問　勞働と困苦に向て、人の高尚なる心靈の狀態は如何。

答　人の心靈の高尚なる狀態とは、神の子として斯る勞苦を恐れざるに在り。

問　最大最幸なる生涯を遂げたる者とは、果して如何なる者なりや。

答　其の人の生涯に遭遇する處の勞働辛酸に對抗し、死に至るも之れに屈せざる者の生涯を以て、吾人は之れを最大最幸の生涯と云ふ。

問　人生の幸福に就て敎示せられたる耶蘇の名言は如何。

答　『人若し其の生命を保たんが爲めに、勉むる者は之れを失ふべし、故に人は其の生命を正義の爲めに失ふ者は之れを得可べし』と云へり、是れ人は決して其の勞苦より逃れんと試む可からず、何時も其の義務と仁愛の召に應じて、快く其の身命を捧げざる可からざるを訓示せり。

問　苦痛辛酸と快樂とは兩立し得可きものなりや。

答　然り、古來の聖賢の士は其の生涯に於て之れを證せり。譬へば耶蘇の生涯、ソクラテスの生涯等の如き、是れなり。

問　惡が果して此の世界の必要條件たり、將又善たり得可くんば、何故に吾人は『惡より救ひ出し玉へ』と乞ひ求むるや。

答　餓鬼元來人生の必要條件にして、又善事なり、故に吾人を驅て之れを免かれしむ、然れども吾人は之れに依りて、自身を汚隕するに非ざるや明かなり、如此世の所謂惡なる者は、吾人を驅て之れを免かれしむるの具たれば、決して吾人を拘束し以て此の理に吾人を繫留するものに非ざるべし。

罪惡

問　正義の行爲とは如何なるものなりや

答　正義の行爲とは、世界に於ける善の分量を增進せんが爲めに盡す處の行爲を云ふ。

問　人若し惡事を行ふたる時は、其の人の生涯に如何なる結果を來するものなりや。

答　彼は必然其の生涯を傷け、其の生涯を萎縮せしむるものなり、何となれば、正義の行は、此の神聖なる宇宙間に於て人の行ふ可き唯一の道にして、之れに反する行爲は此の宇宙の性質と相容れざるものなるを以てなり。

問　人若し充分事物の道理を知了する時は惡事を行ふ事なきものなりや。

答　否な、智識的の人と雖も往々惡事を行ふ事あり、然れども若し人にして世上事物の道理をば神の明知し玉ふが如く了解するを得ば其の人は決して惡行の企望を起さゞるものなり、必竟惡事を行ふ者の智は、未だ以て明智の價なきものなり。

問　何を以て人間は罪惡を行はんとする企望を有するや。

答　人類目下の狀態は未丁年の如く往々自己の嗜慾のみに耽るの傾向ある時代なればなり。

問　何をか罪惡と云ふや。

答　罪惡とは、虛弱なる思想の一種病的意思の發現なり。

問　善意より發せし行爲なるも、只だ其の愚昧なりしが爲め、終に他人を傷害するか如き場合に在ては、之れを以て猶ほ罪惡となし得可きや。

答　否な結果の善惡に係らず、人若し眞に好意の發情により行ひし處のものは只だ不幸なる過失にして、之れを以て罪惡と名づく可からず。

問　此の善良なる宇宙間に、罪惡の存在せるは何故なるや。

答　勿論此の宇宙は善良なる宇宙にして、人は此の理に於て將來成長發達すべき被造者なり、然り而して罪惡は此の成長力の進行に伴ふて起れる一時の現象たるに過ぎざれば、將來人類發達の頂點に達せば自然に消滅す可きや勿論なり。

問　何を以て人間成長の發端とするや。

答　人の動物的性狀を超脫する時代を以て成長の發端とす。

問　何を以て動物的性狀と云ふや。

答　動物的性狀とは利己心と肉慾とのみに沈淪せる者を云ふ。

問　核提の稚子、或は普通動物の利己的にして肉情にのみ支配せらるは以て罪惡と爲すを得可きや。

答　否な、利己心と、肉慾の强盛なるは只だ下級の生活、或は普通動物の性狀の一端なり、故に下級の生活者(兒童)普通動物等に在ては、之れを以て罪惡と見認むるを得可からず。

問　利己心は如何なる場合に於て、罪悪と見認む可きや。

答　人若し利己主義を濫用するは、他人に對して不義なりと思意するを得る場合に於て、始めて利己心は罪悪たるに至るべし、故に人若も利己心は確かに不義なり、不義は確かに罪悪なりとの事實を智覺するは、其の人の己に數歩高等なる階段に進歩せしものにして彼の虎は利己心の何物たるすら、未だ智覺し能はざるを以て、遙かに人間より下層の位置にあるものたるを知るべし。

問　何を以て、利己心は罪悪ならざる可からざるや。

答　利己心は只だ己れ一個人の爲めにのみに生活するものなりとして、隨意に自己の欲するが儘にせんとし、敢て他人の利害を顧みざるのみならず、之れがため他人の權利を侵害するものなるが故に、任他其の人一個人は假りに幸福なりとするも、爲めに他の人々の幸福を傷害する夥多なれば、此の宇宙の目的、即ち世界に善の分量を增進するを妨害するものなるを以てなり。

問　道德的成長即ち心靈的發達とは如何なるものなりや。

答　心靈的發達とは、利己心を脫却し、愛を以て生命の原則と觀ずるに至るを云ふ。

問　利己心を蟬脫するは人の天然性なりや。

答　然り、之れを蟬脫せんとするは人の高尚なる天性なり。

問　各人其の利己心を蟬脫する時は、此の社會をして如何なる狀態とならしむるを得るや。

答　各人其の利己心を脫却する時は此の社會の全躰をして所謂天眞爛熳たる健全社會たらしむるを得べし、是れ恰も一個人の身躰を組織せる各細胞の健康力は、必らず其の全身の健康を產出するも

のたるが如し。

問　如何なる種類の苦痛は、人の心靈を興奮して、如此人性の高尚なる點に進歩せしめ得可きや。

答　本心の苦痛、即ち良心の刺戟は、人の心靈に向て有益なる進歩の母たる、不滿足の念を起さしむるものなり。

問　良心は吾人をして、如何に深遠なる事實を想起せしむるものなりや。

答　良心は未だ吾人の實驗せざりし處の、更らに善良なる理想的人生觀を想起せしむるものなり。

問　人は其の理想自利己(即ち完全なる人間)よりは、目下の狀態に於て遙かに下級に在るは、正しく事實なるを以て、人は盡く惡人なるや。

答　否な、何人と雖も人類を以て盡く惡人なりと論定するを得ざるべし、何となれば人は已に其の自己の理想(即ち完全なる人間)に向て發達しつゝあるの事實明かにして、極惡者何ぞ善良に向て進歩するの企望だも有するを得んや。

問　人若し善良の方嚮に向て成長發達し能はずして、常に利己的、普通動物的狀態にのみ安んずる時は、果して如何なる結果を生ずるや。

答　世界の大法は、萬物をして盡く善良の域に向て進渉せしむべきものなるを以て、若し此の法則に反して成長せざるものは、必ず亡び否らざれば必らず成長するものなり。

問　道德上の罪惡なるものは如何。

答　道德上の罪惡は恰も肉躰上の疾病の如し、人は疾病に其の身を犯さるゝを知るや、健全なる肉躰の生活を遂げんが爲めに、勉勵して

之れを排除す、斯の如く道德上の罪惡は、其心の厭ふ可きものたるを感ずるや、人の良心は道德上健全なる生命を失はざらんが爲め之れを除却せん事を勉むるものなり。

問　罪惡は如何なる處より來るものなりや。

答　罪惡は時として無智より來り、時としては不健康なる情の發動、即ち憤怒慎恚の念慮より來り、時としては一時不義の快樂を貪りたる報酬として來るものなり。

問　道德上の罪惡は、如此く厭ふ可きものなるに、何故に罪惡は屢々人間を誘惑するものなりや。

答　是れ必竟人類が無智にして、其の罪惡の何物たるを知らざるに依り、之れが誘惑に逢ふものにして、恰も小兒が未だ火の熱きものたるを知らずして、一見其の新奇の火色に誘はれて、直接に之れを把持し爲めに火傷を蒙るが如し、然り而して小兒は之れに依りて火の恐る可きを學び、再び其の熱火を直接に把持せざるべし、人間も亦屢々此の如き誘惑に遭遇し、終に罪惡の何物たるを了解し、過を再びせざるに至るものなり。

懲罰

問　天則とは如何なるものなりや。

答　宇宙間に磅礴せる力即ち生命の秩序的現象を以て天則と云ふ。

問　天則なるものは、隨意に變更し、破壞し得可きものなりや。

答　否な、天則は、人の決して隨意に變更し、或は之れを破壞し得可きものに非ずと雖も、吾人は一時人の自然に逆きたるが如き場合を以

て、天則を破壊せりと見做すに過ぎざるべし、然れども天然は依然として不磨不滅たるや勿論なり。

問　天則の違反者は實罰を科せらるゝものなりや。

答　然り、天則の違反者は必らず懲罰を蒙るものにして、人若し放恣にして酒色に耽溺する時は、之れに疾病と貧窮、怠惰惡習と社會の擯斥とを蒙るものにして、其の人は自然同胞間の信用を失ひ、廣き世界を狹く渡らざるに至れるは吾人の日常眼前に目擊するの事實なり。

問　斯る懲戒の目的は何處に在りや。

答　此の如き罰則は、吾人に苦痛を與へ、廉耻の念を興さしめ、終に吾人をして自然の大道に復歸せしむるものたるべし。

問　何をか道德上の罰則と云ふや。

答　德道上の罰則は、即ち、正義の大道を蹈み誤りし者の心靈をして、再び其の大道に歸らしむ可き良心の苦痛にして、是れ即ち正義の不義に對する强盛なる抵抗力なり。

問　此の如き苦痛と抵抗力は、如何なる結果を人心に顯はすものなりや。

答　良心の苦痛は、常に吾人をして、正義を奉ぜしめんが爲めに發する天父の諫言なり。

問　人心の自然法、即ち天性は如何なる理想を發表するを以て目的となせるや。

答　人の天性は正義の道に就くを以て快樂とし、不義の方面に退却するを以て苦痛なりとする事實を發現せり、約言せば、不正の事物は決して成効を望む可きものに非らざるも、之れに反して正義の目

的は、決して失敗に終るものに非ざる可しとの理想を實現せんとするものなり。

問　人間社會の刑罰は常に誤謬なきものなりや。

答　否な、人間社會の刑罰は屢〻誤謬あるを免かれず何となれば、司刑者にして屢〻己れの憤怒或は社會の一種病的意思を以て處罰する事あるを以てなり。

問　然らば刑罰は如何なる目的を以て施行すべきものなりや。

答　其の刑罰は社會の仁惠より發せざる可からず、何となれば凡べて罰則の目的は、犯罪者の心裡に在て、必らず永存すべき善根を保護するに在るものにして、固より仁愛の主旨を離る可からず。

問　何を以て唯一教徒は、神が人類の過失を永遠に責罰するものなりとせる、正統派基督教徒の信仰箇條を否認するや。

答　何となれば、若し懲罰にして人を悔改、移善せしむるの効なくんば、是れ徒勞無益にして、懲罰の精神に違反するものなればなり。況や最善最愛にして靈智圓滿の天父は、斯る不仁不肖の所爲あるの理あらんや。

問　如何なるものを以て、眞の懲罰の法則となすべきや。

答　懲罰は實際箇〻の罪科に相當すべきを要するものにして、若し常に虛僞を語る者ありとせば、自然此の人は朋友間に信用を失墜し遇〻眞實を語るも人誰れか之れを信ぜんや、此の如く懲罰は常に罪科の量と平衡を失はざるものなるが故に、世間の信用を失ふ事多き者は、其の人の虛僞の量多きを證するものなりと知るべし。

問　眞誠なる目的に適ふ處の懲罰は、人心に如何なる感化を與ふ可きものなりや。

答　懲罰は人をして眞に悪事の恐る可く、又自己を傷害するの甚だしきものたるを覺智せしめ、又其の人の同情心を刺戟して、悪行は獨り自己のみならず他人、就中其の最近隣者即ち己れの愛する家族にも損亡を及ぼすの具たる事を發見せしむるものなり。

問　總べて罪悪の上に科する最重なる懲罰は如何なるものなりや。

答　罪悪に對する懲罰の最重なる結果は、即ち神の生命の理に生息せる人の心靈的快樂と、心靈的健康とを根蔕より絶滅せしむるものにして、恰も肉躰の健康は新鮮なる空氣の呼吸に依らざれば保全せられざるが如く、人の心靈は神の仁惠を呼吸せずして、健全なる生活を保持する事能はざるを以てなり。

問　困究は悪事を行ひし者のみ嘗むるものなりや。

答　古來直接或は間接に冤罪の爲めに肉躰上の困苦を嘗めたる無罪者の事跡は、往々人間歴史上の汚點として史乘に其の跡を印するもの少しとせず、然れども是れ當時の社會の犯罪にして、無罪者は斯る困究の爲めに、毫も懲罰的の究苦を感ずる者に非ず、斯る究苦は廉潔の士の地獄に非ず、反て一種の名譽たる可きなり、彼のソクラテス、イエス、ポーロ、ペテロ、タッソー、バンヤン、等は皆な縲紲の辱を受け、近くば四十七義士に向て公儀の掟として死を賜へり、然して彼れ等は之れが爲めに其の心靈と名譽とを毀損せられざるのみならず、今日彼れ等の墓前に香華の絶へざるは、蓋し今人の彼れ等の氣象を追慕し、反て當時彼れ等を所刑せし社會を罰するに非ずして何ぞや、古人の詩に、

"Stone wall do not a prison make,
Nor iron bars a cage.

Minds innocent and quiet take
That for a hermitage;
If I have freedom in my love,
And in my thoughts am free,
Angles alone, who soar above,
Enjoy such liberty."

石のから戸や黒鐵の門の閂はありとても
心しづかに潔ばくの人を閉籠む牢ならず
我もし愛と思想との自由を保ち得なれば
仙家に寢る心地すれ斯る自由を久かたの
あほ空翱翔る天人は只常しへに樂しまん。

とあるは即ち能く無罪者の度量灼々として餘裕あるを明言せしものなり。

問　乍併斯の如き事實を公平に解釋し得可きや。

答　如此天道の是耶非耶を疑はしむる場合を以て、公平に解釋せんとせば勢ひ吾人を誘引して「萬民の生命は全く唯一なり」との道德的觀察點に歸着せしむるものたり、夫れ吾人個々の行爲は究極人類全躰の完全と幸福を期するものにして、決して人は其の一個人の完全と幸福とを私す可きものに非ざるなり、故に社會の一個人は全躰の完全を期するが爲めに、往々困苦の分配を甘受するが如く、是れと同筆法を以て快樂の配布をも受くるを得べき權利を有す、現に惡人上に在れば下悉く彼れと共に災厄を負擔し聖人位にあれば民皆な其の慶に浴するの事實あり。

赦罪

問　他人若し己れに向て好意を表する時に於けると、其の己れを犯せし時に於けると同一の感を爲すものなりや。

答　否な、吾人は己れに好意を表せられたる場合には、其の己れを犯せし時と同一に感ずるを得ず。

問　己れを犯せる者に向ても猶ほ好意を示すべきものなりや。

答　人として己れを犯せる者に對して、好意を表示するは甚だ難しと雖も、吾人にして若し自己の德性を確守せんと欲せば、如何なる暴惡者に對するも常に好意の念を忘る可からず、然らざれば即ち暴を以て暴に報ゆるものにして既でに他人の爲めに化せられ、自ら好んで暴者に犯されたるに等し、斯の如き場合に於て能く自ら忍んで其の好意の念慮を表章せば、以て自ら守るのみならず、終に彼の暴者を感化するを得可きを以てなり。

問　惡人をして其の醜行より善行に移らしむるを得べきものなりや。

答　然り、吾人は古來屢〻人世の實驗によりて之れを見る、彼の友情の力は實に罪人を悔改せしむるに最も有効なるものなり。

問　斯くの如き罪人、或は己れに反抗する者に向て友情を表するを得可きや。

答　是れ實に容易なるものに非ずして、其の目的を達せんとするに當りて非常の忍耐を要し、時としては不慮の辛酸を甘受するの勇氣なかる可からず。

問　惡行を爲せし者が罪の刺戟によりて感ずる處の悲痛を何と名づく可きや。

答　一般に之れを罪人の懺悔或は悔改と稱す。

問　眞誠なる悔改は如何なるものなりや。

答　犯罪者の意中に於て、悪行は己れを害し、又他人を傷ふ事の最も大なるものたるを了解し、再び悪行を爲さゞるべしと、自ら誓ふの實を擧ぐるものを云ふ。吾人は斯る悔改の實を見て之れに滿足を表すべし。

問　斯の如き悔改者を社會は如何に遇すべきや。

答　懺悔せし者を以て社會は未だ曾て彼れの悪行を見ざりしと同然に信認すべし、何となれば彼は已でに罪悪の實に恐る可き忌む可き由縁を解して、道德的智識の瞳睛を開き、已でに從前に勝れる者たるを以てなり、若し社會にして猶ほ彼れを信ぜず、彼れを容れずんば、終に彼れをして善人の社會は非常に寂寥孤立的のものたりと誤認せしめ、更らに罪科を再びせしむるの恐れあればなり。

問　吾人を損傷せし悪行者にして、一旦悔改せし後に於て、彼れをして更らに吾人の信用と親愛とを恢復せしめんとする、吾人の行爲を何と名づく可きや。

答　吾人は之れを宥恕、赦罪、仁免と云ふ。

問　吾人を傷害したる者にして、猶ほ未だ悔改せずと雖も之れを宥恕す可きものなりや。

答　吾人は彼の過失は之れを宥し、又彼れに向て愛憐の情を有すると雖も、彼れにして若し眞に悔改の實を表す可き行爲無きに於ては、何人と雖も彼れを信ずる能はざるべし。

問　悪行者に向て如何に愛憐の情を起し得べきや。

答　悪行者は己れの悪行によりて、彼自らを傷害せし事情と、又彼れが

罪悪に誘惑せられし事物の狀態を觀察せば、何人と雖も茲に一片の憐情を催さゝる者あらんや、惟ふに罪悪は常に犯罪者の喜び樂んで行ふ者に非ず、多くは彼の周圍の狀態は彼れの弱志を驅て悪行者の群に投入するものたればなり。

問　天何ぞ他人を宥恕せざる者を以て、悪行者と同一の位置にあらしむるや。

答　何となれば他人を寛容するの量なき者は、悪者と等しく好意の心を彼れの裡に存せず、反て悪意の生命を持するの證たるを以て、天何ぞ悪意を仁恕し玉ふ者ならんや。

問　何をか御義上總べての罪悪の根元とするや。

答　利己心、嫉妬、悪意は共に萬悪の根元なり。

問　何を以て神は吾人を宥恕するに躊躇せずと云ひ得るや。

答　何となれば、吾人の尊奉する神は天父にして、善意なり、仁愛なり、善意、仁愛は即ち仁恕を蓄積する大なるものなればなり。

問　神の仁恕と吾人の宥恕とは如何なる差ありや。

答　神ならぬ吾人は、決して隣人の意思を透見するを得ず、故に時として其の觀察を誤り、人の行爲を誤解するものなり、然れども神は決して斯る誤解誤判に陷る可きものに非ず、故に人間にして、若し數層完全なる位置に到達するを得ば、斯る誤謬を免かれ、共に神の王族たるを得べし。

問　神の如き寛大なる仁恕を、悪人或は墮落者に向て表示するは實際出來得可きものなりや。

答　然り、彼の善良なる勸化院の管理者、或は監獄教戒者等にして、其の目的を達し、成効を奏ぜる人々は、常に忍耐、愛憐、友情を以て彼れ等

罪人又は不良の徒に接する事、恰も醫師が恐る可き傳染病患者に接して其の義務を全ふするが如し、斯くて眞に神の仁愛と善意とを實際に表章す、其他善良なる双親は、其の不孝の子女ありたる場合に於ても亦同一の忍耐を表示するものにして、是れ即ち人間は神の王族たるの榮爵を擔ふ可き由緣なり。

問　現今社會に於ける罪惡の觀念は如何なりや。

答　人智の發達は、罪惡の上に於ける觀念に一進歩を與へたり、今日道德上罪惡なるものを以て、人間の無智、幼稚、普通動物的狀態の遺孽或は人生の未熟、人生の發達に伴ふ一種の抵抗力及ひ道德的一種の疾病等の諸因が、種々異態を以て寄生物の如く人生中に一時の現象として發するものなりとせり、勿論夥多の道德上の罪惡は醜惡云ふに忍びざるものありと雖も、反て吾人をして斯る道德上の

病者の不幸を憫み、同情を感ぜしむるに至るべし。

問　如此新觀察は、果して實際人世に有益なるものなりや。

答　斯く道德上の罪惡を觀じ來れば、吾人をして自然に此の罪惡を治療するが爲めに奮發心と、自信の念慮とを增加せしむるを得可し、蓋し健全なる神的氣力は確かに病的未熟の力に打ち勝つを得可きものにして、隨て人間の運命は斯る病魔を征服するに足るものたるを確知する敢て難からざるなり。

問　然らば赦罪の原意は果して如何なるものなりや。

答　要するに赦罪の本來の意味は、邪曲岐路に彷徨せる人心をして、人世の本道に誘導する仁愛的補佐たるなり。

○聖人

聖人に就て

問　生れながらにして人は才能を具ふる事ありや。

答　世に非常なる天稟の才能を具備せる者少なからざるが如し、就中有名なる音樂師ビーソーブンの如き、宗教倫理に於て釋迦、孔子、基督、索克拉底の如き、工藝に於て電氣王エヂソンの如きは、實に著しき天才に富める者たるべし。

問　宗教、倫理、哲學、美術、政法等に就て、一種の天才を具ふるが如き人種は何々なりや。

答　吾人は宗教倫理に在ては古代の猶太人、印度人を推し、哲學美術に在ては古代の希臘人を推し、政法に在ては古代の羅馬人を推すを得べし、

問　天才を具有する者は聖人たるを得可きや。

答　否な、天才を具するも必らずしも聖人たるを得ず、何となれば聖とは正確なる意義に於て、完全と同一義なるを以て、苟も聖人たる者は必らず完全に其の天才を具備せざる可からずと雖も翻て天才は必らずしも聖人の如く完全ならざるも亦可ならんか、勿論天才ある者は常に完全圓滿ならん事を企望する者にして、蓋し天才を具する者は最早圓滿に近侍する者たるや明かなり、

問　然らば、聖人は天然普通の人間に在り得しきものなりや、將た超自然的人間なりや。

答　聖人即ち完全圓滿なる善人とは、眞に吾人の天然的性質を成就せ

し者にして、吾人若し天稟の理性と德性とを實現せば、已でに完全圓滿なる善人即ち聖人たるを得べし。

問　古來聖人の上に如何なる謬見を下だせしや。

答　聖人とは古來一種特別にして、超自然的人間の如くに謬想せしは『才子多病』の諺の如く其精神は兎も角も肉躰は大抵虚弱にして、精神の發達と相伴はざる者の如くに想像せられたるが爲め、聖人賢人の美名恐くは誤用せられたるに非るなきを得んか、盖し古昔に在て、所謂聖人なる者の多くは一種の病理的人物に非ざりしか、然らずんば胡ぞ超自然的人間視せらるの要あらんや。

問　完全なる善人とは如何なる者なりや。

答　聖人即ち完全なる善人とは、健全なる身躰を具足し、隨て天稟の其智良能をして活潑に使用し、以て現社會の公益を圖る者の謂にして、決して精神病的人間の妄想を空中に畫くが如き者の類に非るべし。

問　人は神の如くなり得べしとは、如何なる意味なりや。

答　此の壯嚴美妙の宇宙を以て、神の聖旨を顯し給ふものなりと感得し翻て自己の精神と肉躰との關係に向ひ、此の觀念を應用するに當りては、吾人は如何に靈妙なる心靈より此の活潑なる思想と、可愛の肉躰とを現象したるやを感得し、或は神と宇宙と唯一融合するが如く、人も亦其の心靈と肉躰と唯一に融合せるを智覺せば、茲に始めて理想の妙處に逍遙するを得べし、此の如き狀態を稱して、人は至誠にして神の如しと云ふを得べし。

問　聰明靈智にして、善良なる天才を具有する者は、此の人間社會を裨益するを得可きや。

答　然り斯の如き人の社會に與ふる恩澤は、實に自利主義を以て福音と誤認せる人々の社會に害毒を流すの反比例を以て、社會を裨益するものなり、彼れ等の良智良能は發しては山上の垂訓となり、晴夜を照すの燈火となり終に神と人との間の電信線ともなるに至らざれば止まざるべし。

耶蘇基督

問　耶蘇の生涯の特質は如何なるものなりや。

答　耶蘇は實に完全圓滿なる善人の生涯、即ち神の子の生涯を送れり、吾人は彼れの純潔なる生涯によりて神の道德的屬性と人心の道德的可能力とを實際に見るを得たり、蓋し神の子は天父の慈悲心を吾人に表明せんが爲めに來れるものなればなり。

問　當世の人は何を以て耶蘇を神の子となせしや。

答　古の人は耶蘇を以て當時の意味に於て容易に神の子と想像せり、何となれば當時已でに一般の英雄豪傑を以て、盡く神の愛子と想像し、甚だしきに至ては猶ほ存生中の帝王をも神と封じたるの例なきに非ず故に耶蘇が斬新なる豫言者として、或は一種の英雄として、世間に知らるゝや、彼れの仁愛と熱心と全然利己の心なき言行とを見聞するに及び、人々は直ちに耶蘇を以て神の獨り子と叫び稱ふるに至れり。

問　耶蘇の天才は如何なるものなりや。

答　耶蘇は聖人たるの故を以て或る特種の美麗なる天才を具有せり就中正義、仁愛及び宗教的天才に至ては、眞に完全の域に到達せり

故に耶蘇の天眞爛熳たる處は、專ら宗教的方面に在りと云ふを知るに難からず、何となれば彼れは正義と仁愛即ち宗教的眞理の爲め、全く其の死を甘諾せるを以てなり。

問　耶蘇の氣力は如何なるものなりや。

答　耶蘇は宏大なる氣力を有せり、故に彼れは明らかに善の必らず惡に勝ち遂得可き事實を立證するの力あり、而して彼は其の短かき生涯中に困難、苦痛及び虐殺に遭遇せりと雖も、反て此れ等の惡を征服するの力を有し、終に善良なる應報を得たり、蓋し彼れの殘忍なる死を迎ふるや、曾て彼れが存生中に得たる同情よりも、更らに數層の愛情を全世界の人類より享くるに至れり。

問　耶蘇に與ふるに如何なる尊稱を以て適當なりとするや。

答　耶蘇に與ふるに、眞實圓滿なる善人、即ち聖人なりとの尊稱に勝れる贊詞なかるべし然れども或る人々は耶蘇を以て人界の至聖者よりも一層宏大なる名稱を與へんとして其の極終に『眞の神なり』と呼び、彼れを强て潛上の人即ち神を冒瀆する者たらしめざれば止まざるに至れり、是れ豈彼れを尊崇するの道ならんや、加之耶蘇は未だ曾て斯る大膽なる非望を有せし痕跡だに發見する能はざるに於ておや。

問　耶蘇は只だ人界の聖人にして超自然的の神ならざるも、彼れを以て宗教の開基者として尊崇し敬愛するを得るや。

答　然り耶蘇は或る種の人々の主張するが如く、超自然的即ち人間以外の者なりと信ぜざるも吾人は優に彼れの性行に就て尊恭と敬愛の眞意を表し得べきものにして、歷史的眞の耶蘇と吾人との間に於ける親密の同情は、之れが爲めに毫も輕重せらる可きものに

非ず、何となれば、彼れは眞に人間として、吾人の屢々遭遇する處の誘惑に遇ひ、或は時として自己の生涯を如何に處すべきやを定め難く、憂心忡々として失望の域に迫り或は世人に誤解せられ、單獨にして協力者なく四面に楚歌の聲を聞き、彼れは其の同胞に凌辱せられたり、然れども耶蘇は强盛なる氣力を以て、盡く之れ等の逆流に反抗し、死を誓て之れを征服せり、斯の如き熱心に向ては如何に冷淡無頓着の輕薄者と雖も、豈同情の感勿からんや、之れに滿腔の同情を表することこそ人の至情と謂ふ可きなり。

問　然らば耶蘇は神に非ざりしや。

答　耶蘇は或る人々の主張するが如く、宏大無邊なる意味の神即ち無限絶對にして萬有の大原因たらば、何を以て或る時は誘惑せられ、或る時は哀み、或る時は祈り、又或る時は失望の淵に沈みたる事跡あらんや、故に吾人は斯る陳腐の鬼神説には全然左袒するを得ず、反て耶蘇の曾て教訓せし如く、人類就中善人は神の愛子なりとの主意に於て人間は盡く神性を具有すとの意見は、彼れの宗教信徒、彼れの尊崇者として疑念なく信認するを得べし。

問　耶蘇の己れの主義に對して盡せし忠義の程度如何。

答　耶蘇は愛の爲め、自己の所有として、其の最重最愛なるものを他人に與るに吝ならざりし、故に其の全躰を擧げて之れを仁愛、即ち正當と認むる處の主義に與へ、終に己れの生命をも謹んで之れに捧げたり。

問　然らば、之れによりて耶蘇は後世の人心に如何なる作用を有するや。

答　歴史的耶蘇は、眞に吾人の理想なり、何となれば吾人は耶蘇が曾て

仁愛と正義の爲めに、總へての有を盡く喜んで與へしが如くせざる可からずと理想するが故に今猶ほ彼れは社會原動力の一となれり。

問　耶蘇は果して新宗教を開基するの目的を有せしや。

答　何處に於ても彼れは新宗教を開基せんとするの目的を有せりとの確證を發見する能はざるべし、單に猶太國民の思想中、既でに蘊蓄せし處の理想を純直に實現し、當世の注意を喚發せしに過ぎざりし、蓋し孔丘の『述而不作』と相似たるものならんか。

問　耶蘇は神人の關係を如何に比例せしや。

答　彼れは神の概念を表白するに當り、萬民の最も容易に感得し得可き父、即ち天父なる名稱を以て之れを表白せり、故に彼れは又萬國の民を以て盡く同胞なりとせり。

問　耶蘇は如何なる者を以て天國の民となせしや。

答　彼れは他人に善行を施し、他人の爲めに盡し得る者を以て最大幸福なる人物とせり、故に自利のみを目的とする者を以て極惡最小人となし、以て天國の民たるに適せずとせり。

問　耶蘇は財産の私有權を以て、如何なる程度に看破せしや。

答　彼れは仁惠と愛恤との氣風社會に隆盛なるを以て、人世の殷富なりと信じ、隨て總べての財産は社會の公益を增殖すべき陪介物と信じ、此の條件の下に、人々各自の財産所有者たるものなる事を承認せり。

問　耶蘇の生國たる猶太國人は、古來如何なる宗教を奉ぜしや。

答　猶太人は盡く希伯來教を信奉せり。

問　希伯來教は萬國民に普及すべき性質を有するや。

答　希伯來教を奉ぜんとする者は、何人に關らず或る一定の風俗習慣に服從せざる可からず、換言せば全く猶太人に歸化し其の國古來の風俗習慣に嚴重に浸染せざる可からず、如此困難は終に猶太教をして、宗教の普及的勢力を減殺せしむるに至れり。

問　耶蘇は斯る希伯來の風習、即ち當時の四圍の理想に全く化せられざりしや。

答　彼にして若し全く此れに化せられし事なくんば、耶蘇は普通人情に疎き不具者にして、到底一般の人情を以て其の性行を律し、之れを討究するの道なきに至るべし、然れども彼れは斯る不具者に非る限り、必らず之れが多少の感化を受けたりしや勿論なり。

問　耶蘇の時代に於て其の燒點に達せし猶太人の思想の潮流は如何なるものなりや。

答　猶太人は當時政治上の不幸と困難とに屢〻遭遇し過去のダビテ王、ソロモン王の時代の如き繁榮は到底現世に於て望む可からざるものなりと失望し、或る一種の厭世的感情に驅られて想像せる空想を將來に畫き以て自ら慰する具となせり、此の想像は即ち、神は此の世界を一新せんが爲めに、他日此の世界の終局は來るべし其の際に在ては、善者惡者の審判、即ち神の選民たる猶太人と之れを虐待せし他國民との裁判を開庭せらるべしとし、或は之れに先つて猶太國の嚮導師即ち救世者なる者降誕し、以て隣國の蠻夷を平定し、再びソロモン時代の榮華を回復すべしとし、或は人の運命の拙劣なる者は今生中より惡鬼なる者の據る處となるべしとするが如き迷信妄想を有せり、而して耶蘇も亦多少此れ等の風潮に化せられたりし證跡は福音書中處々に散見せり。(馬太傳十二章自

廿節至廿四節、同廿五章自三十一節至四十一節等)然りと雖も耶蘇の教訓の心髄に至ては、猶太人の風習を脱却し、普及的宗教の特性を具有せり、何となれば其の訓戒の基礎は普く人間の真心並に人間の宗教心の根底にありて、彼の國の風習慣行の一部に固着せる希伯來教の弊害を脱却せるものなるを以て其の説く處能く萬民の心腑に貫徹するを得るものなり。

問　耶蘇の信仰を總括すれば如何なるものなりや。

答　彼れは此の宇宙を以て神の世界なりとせり、換言せば此の世界は神聖なる宇宙なり、又人間を以て神の世界の住民とし、天父の如く神聖なる神の子女たるに適ふ生活を遂げざる可らずとせり、隨て人の品行は方正潔白にして天父の正義仁愛を其の同胞に示さゝる可からざる由縁を主張せり。

問　古來耶蘇の如く著生を訓戒教導せし者ありや。

答　然り、支那、印度、ペルシヤ、希臘、羅馬等の聖賢の高尚なる遺訓は、皆靈く耶蘇と相類似せる訓戒を垂れ後世を稗益せり、蓋し是れ等の聖賢と雖も亦多少其の國家在來の風俗習慣の感化を受くるに至ては、基督の猶太國風に於けると敢て甲乙なきが如し、此れ等諸聖の遺訓に至ては更らに他日を期して本書の缺を補ふの時を俟たん。

問　耶蘇の他に正義、仁愛の爲めに其の身命を犧牲に供せし者ありや

答　然り、古來各國に於て屢〻斯る聖賢の俗世の逆流に立ちし類例あり、諺にも『親の殺せし聖人の紀念碑は、多く殺戮者の子孫によりて建てらる』と云ふを以て見るも、亦明らかに聖賢が屢〻社會に志を暢ぶるを得ずして虐待せられたりし事實を推測するに足れり、孔孟の聖賢にして王者の位を得ず、生涯各邦の間に流落し、終に志を

得ずして死し、索克拉底は愚者の讒構によりて毒杯を擧げ、爲めに普通一般の考ふるが如き天壽を全ふする能はざるが如きは、即ちその一例に過ぎず。然れども斯くの如き人々にして、始めて悪に打ち勝つの力ある者なり、何となれば困究虐待に接して、常に其の善意を失はず、辛酸は不平なく甘受し、利を以て誘ふ事能はず、死を以て強迫する能はず、大節を持して動かず、刀刃以て斷つ可からざる剛志の人は、即ち悪を征服せし勇將たればなり。

神の化身

問　人間を以て神の子と呼ぶの理由を明かにせよ。

答　神の子とは、即ち人の心靈は神性を具有せりと云ふに在り、換言せは人間の裡に伏在せる心靈即ち人の思想し愛憐する處の能力は、宇宙の聖靈即ち神の奇しき意思と同一種類なるを以て、人は神の子なりと云ふものなり、惟ふに物質は宇宙間何處に至るも盡く唯一なるが如く、思想即ち靈に於けるも亦悉く唯一なりと確認するに難からざるを以てなり。

問　一般の基督教徒は耶蘇を以て如何なる者なりと信ずるや。

答　正統派と自稱する基督教徒は、耶蘇を以て無限絶對の神が自ら肉體を就つて人間となり、此の世界に降臨せるものなりとし、之れを尊崇禮拜す、斯の如き思想を以て神の化身と名づく、即ち神は人身の中に生息するの意なればなり。

問　如何なる理由に依り斯の如き化身説を主張せしものなりや。

答　耶蘇の愛情を以て、神の仁愛の發表とし、其の源を神に發して耶蘇

の肉體中に流注せしものなりと想像せり、之れが爲めに耶蘇は神が肉體を被れる者たりとせり、此の如く世人は迷信に妄想を重ね、終に耶蘇の心靈を以て『至神の神』なりと牽強し、古來正統派基督教徒の信仰少條の文字章句の上に於て、此の化身の說を附會するに當り、非常なる苦辛を嘗め盡くせり、然れども此の說の最も甚だしき誤謬は單に或る一個人即ち耶蘇のみに神の仁愛が發現せりとして、他に神の無限なる仁愛の顯現せる事實を否定するに在り、之れに反して今日世界の實際の事實を通覽すれば、神の稜威と仁愛は何處に論なく至誠、正義、仁愛として萬民の良心、即ち心靈の裡に燦爛として輝き亘れり、之れを蔑視する處の化身說は豈將來の心靈を支配し、吾人の理性を滿足するに足らんや、吾輩は寧ろ宇宙を以て直ちに神の化身なりとするの說を以て、最も公平なる化身說

として承認すべし。

聖人の教訓

古への聖人が後昆に垂示せし遺訓たる其數實に枚擧に遑あらざる可し、然れども吾子は只だ左に其の著名なる二三士の遺訓を擧げ、他日を期して更らに四聖人の訓諭を追加する事あるべし。

基督の教訓　其一

（以下禮拜提要より抜萃す）

イエス群集を見て、山に登り坐する時、その弟子等來りければ口を啓きかれらに敎へ曰けるは、心の謙る者は福なり、天の御國はその人の有なればなり、哀む者は福なり、その人は慰められるればなり、柔和なる者は福

なり、その人は地を嗣ぐべければなり、心飢渇きて正義を慕ふものは福なり、その人は飽くことを得べければなり憐む者は福なり、其の人は憐まるゝことを受くべければなり心の潔きものは福なり、その人は神を見るべければなり、平和を求むる者は福なりその人は神の兒輩と稱へらるべければなり、正義の爲に窘迫らるゝものは福なり、天の御國はその人のものなればなり。

なんぢらは世の光明なり、山の上の城邑は隱るゝと能はず、燈を點して之を箱の中に置くものはなく、臺の上に置きて、室にあるすべてのものを照らすなり、斯く人人がなんぢらの善行を見て、天に在ます父を崇むるやう、なんぢらの光明を人人のまへに輝かせ、(馬太傳第五章三節乃至十二節及十四節乃至十六節)

基督の教訓　其二

なんぢ自身の爲に、蠹くひ銹くさり、盜賊の穿ちて盜むところの地に財寶を儲ふるなかれ、蠹くひも銹くさりもなく、また盜賊も穿ちて盜まざる所の天に、財寶を儲ふべし、そはなんぢの財寶のある所には、心も亦そこに在るべければなり、

身の燈明は目なり、もしなんぢの目、瞭かならば全身明かならん、されどなんぢの目、眊からば全身暗かるべし、この故になんぢの中の光明、もし暗からば其の暗きこと、如何に大ならずや、人は二人の主に事ふることは能はず、そは此を惡み彼を愛み、これを親みかれを疎むべければなり、なんぢら神と財寶に兼ね事ふること能はず、是の故にわれなんぢらに告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲み、また身體の爲に何を著んと思ひ煩ふ勿れ、生命は食物より勝り、身體は衣服より勝るにあらずや、天空の鳥を觀よ、稼きもせず穡もせず、また倉庫にも蓄へず、然るになんぢらの天

の父は之を養ひ給ふ、なんぢらは之よりも大に勝れるものならずや、なんぢらのうち誰か思ひ煩ふて、其の生命を寸刻も延し得んや、また何んぞ衣服のことを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして育つかを思へ、勞めず紡がざるなり、われなんぢに告ん、ソロモンが榮華を極めし時だにも、其の裝この花の一に及ばざりき、神は今日ありて明日爐に投入れらるゝ野の花すら斯くよそはせたまへば、之に勝りてなんぢに著せざらんや、噫信仰うすき者ぞ、故に何を食ひ何を飲み、何を著んと思ひ煩ふなかれ、これみな異教人の求むるものなり、されどなんぢらの天の父は、凡て此等のものゝ必要ならぬことを知りたまふ、なんぢら先づ神の政治と、その正義とを求めよ、然らば凡て此等のものは、なんぢに加へらるべし、この故に明日の爲に思ひ煩ふなかれ、明日の事は、明日之を思ひ煩へ、その日にて足れり、之に過ぎるは惡しゝ、（馬太傳第六節十五節乃至三十四節）

基督の教訓　其三

求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らば逢ひ、戸を叩けよ、然らば開かれん、そはすべて求むる者は得、尋ぬるものは逢ひ、戸を叩くものは開かるべければなり、なんぢらのうち、誰かその子パンを求めんに、石を與へんや、或は魚を求めんに蛇を與へんや、なんぢら惡しき者ながら、其の子に善物を與ふることを知らば、況して天に在すなんぢらの父は求むる者に、善物を賜はざらんや、故になんぢらが凡そ人に爲られんと欲することは、その如く之を人に爲よ、これ律法と預言者の意なり、（馬太傳第七章七節乃至十二節）

基督の教訓　其四

綿羊の容貌ありて、殘忍なる狼の內心を持ち來る僞の預言者を防げ、な

んぢらその結ぶ所の果に由て之を識るべし、誰か荊棘より葡萄をとり蘺藜より無花果を採ることをせん、すべて善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結ぶなり、善樹は惡果を結ぶことを能はず、又惡樹は善果を結ぶことを能はず、凡そ善果を結ばざる樹は斫られて、火の中に投げ入らる、是の故にその果に由て之を識るべし、我を呼び主よ主よといふもの皆必ず天の政治に入るにあらず、たゞ天に在ますわが父の旨を行ふ者のみ之に入るべし、是の故に何人にてもわがこの諸言を聽て之を行ふ者は、磐の上に家を建てし智人に譬へん、雨は降り潦水はいで風は吹き、その家を撞つも倒るゝことなし、そは基礎をその磐の上に据たればなり、されば何人にてもわがこの諸言を聽て、之を行はざる者は、沙の上に家を建てし愚人に譬へん、雨は降り潦水はいで風は吹き、その家を撞ちしかば倒れて、その倒は大なりき、（馬太傳第七章十五節乃至二十九節、二十二、三節を除く）

イエス譬喩をもて、多端の言を語りて曰けるは、視よ種子を蒔くもの蒔くために出でたり、蒔ける時に或る種子は路の旁に落ちしが、鳥來りて之を啄み盡せり、或る種子は土の薄き磽地に落ちしが土の深からざるに因て、直ちに萠いでたり、されど日の出でし時、曝かれしかば、根なきがゆゑに枯れたり、或る種子は荊棘の、中に落ちしが、荊棘そだちて之を蔽へり、他の種子はよき畑に落ちしが、或は百倍或は六十倍或は三十倍の實を結べり、耳ある者は聽くべし、

故に種蒔の譬喩を聽け、天の政治の教を聞きて悟らざれば惡しきもの來りてその心に蒔かれたる種子を奪ひ去る、是れ路の旁に蒔かれし種子なり、磽地に播れたる種子は、これ道を聽て速に喜び受れども、己のう

ちに根なきに由りたい暫らく耐ゆるのみ、道の爲に患難、あるひは窘迫の起る時は忽ち躓くものなり、また荊棘の中に蒔かれし、種子は、これを聽けども、この世の氣遣と財寶の惑に、道を蔽はれて實らざるものなり、よき畑に蒔かれし種子は、これ道を聽きて悟り、百倍或は六十倍或は三十倍の實を結ぶものなり、（馬太傳第十三章三節乃至九節及十八節乃至三十二節）

基督の教訓　其六

茂に一個の教法師、立ちてイエスを試み曰けるは、師よ、われ限りなき生命を得んには、なにを爲すべきや、イエス曰けるは、律法には如何に記るされしや、なんぢ如何に讀むか、答へて曰けるは、なんぢ心を盡し、精神を盡し、意を盡して、なんぢの主なる神を愛すべし、また己れのごとく隣人を愛すべし、イエス曰けるは、なんぢ能く答へたり、之を行へ、さらば生きん、かれ自身を罪なきものにせんとて、イエスに曰けるは、わが隣人とは誰なりや、イエス答へけるは、或る人エルサレムよりエリコに下る時、強盜に遇へり、強盜その衣服を剝ぎ取り、且之に傷つけて死んとするばかりになして去りぬ、斯る時に或る祭司、この路より下りしが、之を見て其の側を通り過ぎたり、又「レビ」の人も此所に至りしが、近寄り見て同じく其の側を通り過ぎたり、遂に或るサマリア人旅して此所に來り、之を見て憫れみ、近寄て油と葡萄酒とをその傷に沃し入れ、之をつゝみて己が畜に乘せ一旅舍に伴ひ往きて介抱せり、翌日銀二枚を出し主人に渡して此人を介抱せよ、費もし之よりも多からば、わが歸りの時なんぢに償はんと曰へり、然らばこの三人のうち、孰か強盜に逢ひ者の隣となんぢ思ふか教法師曰けるは、かれを憫れみたる者なり、イエス曰けるは往てなんぢも同じく爲せよ、（路加傳第十五章二十五節乃至三十七節）

また自己を義人となし、自ら恃んで人を輕んずる者どもに、イエス、この譬喩を語りて曰けるは、二人禱らんとて神殿に昇る、ひとりは「パリサイ」人、ひとりは稅吏なり、「パリサイ」人立ちて自ら斯く禱れり、神よ、われは他の人、即ち掠奪、不義、姦淫する者のごとくならず、またこの稅吏のごときの者にもあらざるを謝す、われ一週間に二次斷食し、且わが所得の十分の一を獻ぐ、稅吏は倒かに立ち天を仰ぎ見ることもせず、たゞ胸を拍ちて、神よ罪人なるわれを憐れみたまへと曰べり、われなんぢらに告げん、此の人は彼の人よりも義とせられて、その家に歸る、誰にでも自ら高ぶる者は下らる可し自ら謙りたる者は上げらる可し、（路加傳第十八章九節乃至十四節）

神に關する思想

（禮拜提要より拔萃す）

其一

印度人の思想、ウパニシャド書に凝らし今を隔ること凡二千七百年前

あらゆる智慧に冠絶せる、一の至高なる心意ありて動かせども動かされず遠けれども近きものなり、

獨一の生ける眞神ありて、窮りなく、偏頗なく、また情慾なく智慧と眞善との限りなき能力を有し、すべての物の造主たり守護者たるなり、

凡人は水中に諸神を索り、愚者は森林瓦石のうちに、諸神ありと思ひ、博學なる人士は諸星宿のうちに、之を求むれども、智者はたゞ『普及なき心意』を崇拜す、

かれは智慧の主宰にして、自ら存在し純清完全知らざる所なく在まさ

いる所なし、

永遠よりかれは、すべての受造物に貴重なる目的を賦與せられたり、誰もかれに狎るること能はず、如何なる言語も、よくかれを解説すること能はず、如何なる智力も、かれを理會すること能はずたゞ智者は至高なる存在者を畏るゝことあるのみ、

其二

印度人の思想、ヴヰダ書に據る今を隔るゝこと凡そ三千四百年前

われらの崇拜すべき神はたれぞや、かれは生命と氣力とを與ふるもの、死ぜざる性を造りて、死を庇護するもの、その能力に由り、この起臥する世の惟一の王者、山嶽河海に由て、その能力あることを宣言せらるゝもの、天空を輝かし、地を形くりしもの天＝實に諸天の天を奠きしもの空中に光を分ちしもの、即ちわれらが崇拜すべき神ならざるべからず、

其三

印度人の思想

わが心に、神の足跡をおきまつる、果して然らばわれなにゝか比せん、わが神はいづこにも在ます、それ人の最も貴き言語の内外にも、聖經にも、暗夜にも、深遠なる蒼穹にも、眞理を知れる者のうちにも、世の忠信なるものゝうちにも、わが神は在ませり、

其四

古代希臘人の思想

あらゆる存在者に先ち、また之よりも高き、一の識らざる存在者あり、かれは萬物、即ち天體、及びそのうちの諸物の創造者なり、かれはすべて一の能力に於て顯はれし生命、裁斷、光明なり、またかれは顯明と顯明ならざるとに拘はらず何事をも生出せる一の能力なり。

われら混沌たるなかより、秩序を定めし永遠、智慧、完全なる愛(神)を頌めたゝへん、かれは先なり後なり、始なり終なり、あらゆる存在者はかれよりその始原を受く、かれはあらゆる存在者の第一の父なり、原因なり勢力なり、たゞ一の能力、たゞ一の主宰たゞ一の普及なる王者たるのみ、

其五　波斯人の思想、ゾロアストルの經典に據る今を距ること凡二千四百八十年前

神は最も真善なる思想と、最も眞實なる說話と、最も正直なる行爲とのうちに顯はれたまふ、かれの純潔なる靈氣によつて、受造物に健康繁榮、信心及び無窮なることを賜ふ、かれはあらゆる眞理の父なり、

其六　古代支那人の思想、孝子道德經に據る今を距ること凡そ二千六百五十年前

(この中章道は即ち造化主＝神＝われらの天父を指す)

形體なく恒に變はらず、至らざる所なく健にして、疲るゝことなきものあり、われその名を知らざれども、字して道と曰ふ、なほ强ひて之を大と名づく、宇宙の間に道と天と地と王との四大ありて、王はその一に居り、その法は地より出で、地の法は天より出で、天の法は道より出で、道の法は獨りみづから道より出づ、大道は適かざるところなく、左にも右にも在まし、あらゆる物は之に由て生じ、また何ものをも辭ませられず、その聖業の成りて後は之に居らず、あらゆる物を愛して之に必需物をあたへ給ふ、されど何ものもこれが主たることなし、

萬物は道より生じ、その能力に由て支へられ、その勢力に由て全ふせらるゝがゆゑ、萬物にして道を畏み、その德を敬はざるはなし、これ何等の命令にも由ることなく、たゞ自然の勢力に由るのみ、如何となれば萬物の發生、扶持、形象、成熟、養育、屈護は、道の能力に在ればなり、

道は萬物の保護者、善人の扶助者、惡人の救者なり、

古來道を貴ぶ所以を問へば、邪惡あるものを探り得て、之を宥したまふがゆゑにあらずや、是の故に永遠の道はあらゆるものゝ中最も貴く在ます、

道の生命は、溪や川が洪水や大海となるがごとく、何處にも至るなり、

それ天の道は、弓を張るものゝ如し高ければ之を抑へ、低くければ之を擧げ、餘りあるものは足らざるものに與ふ、人のなす所はこれが反對なり、

天道は私なくして、絶えず善人に與みす、

その大なる理想を獲れば、天下はなんぢらに就かん、就くも邪惡なく、たゝ安寧、平康、歡喜のほかなかるべし、

道德經の原文に曰く、寂兮寥兮獨立不改周行不殆吾不知其名字之曰道強爲之名曰大道大天大地大王亦大城中有四大而王居其一焉人法地地法天天法道道法自然○大道汎兮其可左右萬物恃之以生而不辭功成不居衣被萬物而不爲主○道生之德畜之物形之勢成之是以萬物莫不尊道而貴德道之尊德之貴失莫之命常自然故道生之畜之長之育之成之熟之養之覆之○道者萬物之奧善人之寶不善人之所保○右之貴此道者何也不曰以求得有罪以免耶故爲天下貴○譬道之在天下猶所以川谷之於河海○天之道其猶張弓、與高者抑之下者舉之有餘者損之不足者補之天之道損有餘而補不足人之道則不然○天道無親常與善人○執大象天下往往而不害安平泰

其七　波斯人の思想

世の最たかく、また至ふかき者は、主たるなんぢに在り、われなんぢの何たるを知りまつらず、たゝなんぢは自ら原因たらせたまふものなり、

其一　希伯來教經典及新約聖書

なんぢ心を盡し精神を盡し、意を盡し、氣力を盡し、なんぢの主なる神を愛すべし、これ第一にして大なる誡命なり、

第二も亦之に同じ、己の如くなんぢの隣人を愛すべし、これより大なる誡命なし。

人を愛するものは律法を全ふす、それ姦淫するなかれ、殺すなかれ、偷むなかれ、貪るなかれ、このほかなほ誡命ありとも、己れの如く、なんぢの隣人を愛すべし、と曰へる言の中に含みたり、

愛は隣人を害はず、是の故に愛は、律法を全ふす、

われら互に相愛すべし、愛は神より出づればなり、おほよそ愛ある者は神に由て生れ、また神を識るなり、

神は愛なり、凡そ愛に居る者は、神に居り、神、またかれに居る、なんぢら彼我の重任を任へ、斯してキリストの律法を全ふすべし、

なんぢの隣人を愛み、なんぢの敵を憾むべし、と曰はれしをなんぢら聞けり、されどわれはなんぢらに告げん、ならぢら敵を愛み、なんぢらを窘むる者の爲に祈禱せよ、斯くすればなんぢらは、天に在ます父の子たることを得ん、それ天の父はその日を善者と惡者との上に昇らせ、その雨を義者と不義者との上に降らせたまへり、是の故に天に在ます父の完全なるが如く、なんぢらも完全なるべし、

惡に勝たるゝなかれ、善をもて惡に勝つべし、

なんぢ愼みて惡をもて、惡に報ゆることなく、常に互に善を追ひ、またす

べての人にも、善を及ぼすべし、

律法の旨意は、潔き心と、善き良心と、偽りなき信仰なり出づる所の愛なり、

なんぢの父と母とを敬へ、

なんぢら各おのれの如くに妻を愛せよ、妻はそが夫を敬ふべし、

兄輩よ、なんぢらすべての事に於て、兩親に順へ、これ主の常に喜びたまふ所なり、

父なる者よ、なんぢら兄輩を怒らするなかれ、恐らくはかれら氣を落さん、たゞ主の教と、誡命とをもて、之を育つべし、

僕なる者よ、なんぢすべての事に於て、その主人に順へ、人を喜ばす者のごとく、目の前のつとめをもてせず、神を畏れ敬ひ、心の眞實をもてせよ、

主人なる者よ、なんぢらも亦天に主人あることを知りて、公平なることを、その僕に施すべし、

虚偽をすてゝ各隣人に眞實を語るべし、そはわれら互に一體の中の部分なればなり、

偷むものはなほ盗むべからず、寧ろ勵みて貧者の施與を得んがために、手づから善工をなすべし、

すべて受くべき者には之に與へ、貢を受くべき者には之に貢し、税を受くべきものには之に税し、敬ふべき者は之を敬ひ、尊むべきものは之を尊めよ、

互に愛するのほかは何物をも人に負ふなかれ、

喜ぶ者と俱に喜び哀む者と俱に哀むべし、

われら強き者は、己を喜ばすことを圖らずして、強からざる者の弱きをも忍ぶべきなり、

興ふるは、受くるよりも、なほ幸福なり、

もろ〳〵の很毒、恚憾、忿怒、喧囂、謗讟、またすべての怨を、なんぢらのうちより捨つべし、互に信情と憐恤とあれ、また神のなんぢらを救したまへる如くなんぢらも互に救すべし、

われら互に怒り互に妬むことを爲して、空しき榮譽を求むるなかれ、自ら欺くなかれ、神は侮るべき者にあらず、何にても人の蒔くところのものは、又之を刈らん、

己れの肉體の爲に蒔くものは、肉體より腐敗を刈り、靈氣の爲に蒔く者は、靈氣より、限りなき生命を刈り取るべし、

なんぢらの死すべき死體をして、罪の支配を受け、その慾に從はしむるなかれ、またなんぢらの肢體をして、罪惡に循はしむるなかれ、

密通を避けよ、密通を行ふものは、己れの身を犯すなり、

なんぢらの身は、なんぢらのうちに在る聖氣、即ち神より受けし所の者の宮殿にして、己れのものに非ることを辨へざるか、是の故になんぢらの身をもて神の榮光を彰はすべし、

惡を惡み善を慕ふべし、

すべての事を驗して、その善きものを保つべし、

すべての守るべきものよりも超りてなんぢの心を守れ、そは生命の流これよりいづればなり、

兄弟よ、われをはりに言はん、すべて眞實、尊敬、公義、廉潔、愛すべく聞えあるべきこと、また如何なる德、如何なる榮譽にてもなんぢら之を思へ、

われら善を行ふことに倦むべからず、もし倦まずんば時に至りて、刈り取ることを得ん、

其二　支那、（抄譯）

われは、人おの〳〵絶えず、自ら戒、心すべきことを知る、上天は何ものも、逃るゝことのなき聰明あり、何ものもその命に逆ふこと能はざるなり、われは上天が萬物を鑒みたまひて、すべての事におよび、絶えず何處にも照臨したまふことを知る、

上天は旭日の暗き廬を照らすがごとく、すべての心の深底までも輝きわたる、われらは二個の樂器が、互に相應じて音をいだすがごとく、天の光明の反射せんことを勤めざるべからず、

其三　支那、孔子、（抄譯）

德は遠きや、われ有德の士たらんことをねがふ、觀よ德はこゝに在り、德は王者の御車よりも疾く走るなり、

誰か終日德の爲に、その力を用うるものあらん、われその力の及ばざる事由を見ざるなり、

人おのれの地位なきことにかゝはるべからず、宜しく自己に適へることにかゝわるべし、

德はひとりおかるゝものにあらず、德を行ふものは必ず隣あるべし、

善に上達して、確く之を抱くべし、

確實、忍耐、質朴、謙遜は德にちかし、

人おの〳〵德は、おのれに何をかなすやを思へ、德の行爲を成さゞるものは、師たる可らず、

其四　支那、老子道德經に據る今を距ること凡二千五百年前（筆譯）

天の下、水より柔弱なるものはなし、されば堅く強きものを攻むるに、之に勝つものゝなきは、その之に易ゆることのなきを以てなり、弱きものが強きものに勝ち、柔きものが剛きものに勝つことのあるは、普く知られしかども、能く之を行ふものなし、天の道は爭はずして、すべてに勝ち招かずして、自ら來り平かにして善く謀るなり、天の網はその目疎なれども、一物として捕へられざるはなし、

道德經の原文に曰く○天下莫柔弱於水而攻堅强者莫之能勝以其無以易之弱之勝强柔之勝剛天下莫不知莫能行○天之道不爭而善勝：……不召而自來坦然而善謀○天網恢恢疎而不洩

其五　支那、孟子、（抄譯）

人の正しき、感情をもて自らその爲すを禁むる所のことは之を爲さしむべからず、また、その願ふを禁むる所のことは、之れを願はしむべからず、

人みな人の害はるゝを、見るに忍びざるの心あり、今もし不意に孩提の井に陷ゐらんとするを見れば、誰にても驚きて之を憫れみ傷むの心あり、こはその孩提の父母と交際あるがゆゑにもあらず、名譽を鄕黨や朋友に要むるがゆゑにもあらず……されば人の不幸を見て、憫れみ傷むの心なきものは、人にあらざるなり、わが不善を羞るの心なきものは、人にあらざるなり、物事に讓るの心なきものは、人にあらざるなり、善惡を是非するの心なきものは、人にあらざるなり、この四つの心は、人の手足の四つあるがごとし、この、四端ありて、なほ自ら能はずと云ふものは、自ら賊ふものなり、

其六　支那、孔孟卷酌（摘要）

君子は何事にても過失あらば、これを己れの故なりと思ひ、小人は然らず、これを他人の故なりと思ふ、

弓を射るものは君子に似たるところあり、もし矢を放ちて正鵠に外るいとあらば、反つて斯はわが身の曲れるなりと知るなり、

仁者は射者のごとく、己を正ふして、後にその矢を放つ、もし的に中らざるとも、決して己れに勝てるものを怨みることなし、反つてこれを己れに求め、わが過てるを知るのみ、

其七　支那、孔子（抄録）

凡そ人を愛すれば、必ず相應の勞をすべきなり、志士仁人はたゞ己が生をのみ求めて、仁を害ふことなかるべし、身を殺すとも仁を成すこそあるなれ、義を見ながらその義をなさゞるは、勇氣あるものにあらず、もし夫れ善と知りしうへはこれを、行はざることを得ざるべし、

其八　皇國、神武天皇陛下和論語に據る

人と生れて、よろこび、いかり、あはれみ、たのしみ、この四つの事あり、この四つの事の、いまだおこらぬ、是を人身の神德といふなり、四つのものおこりてのち、よろずたがはぬを一德といふなり、

其九　日本、大和俗訓

陰德とは善を行ひて人に知られんことを求めず、只心の内に竊かに仁愛を保ち行ふをいふ、凡そ人の患を憂ひ、人の歡を喜び、人を憐み惠むに、

鰥寡孤獨の便なき人を先にし、人の飢たるを救ひ、凍えたる人に衣を與へ、勞れたるを助け、病者を救ひ、道橋を修理し、人に害あるを除き、人に利益あることをなし、人の中を和らげ、人の善あるを譽め、人の過を隱し、人の小過を宥し、人の才藝を用ひ薦め、妄に人を怒らず、人を怨みず人の怒爭ひを止め、假りにも人を譏らず、人を侮らず、人を奪はず、人を妨げず、人の善を勸め、惡を諫め、禽獸蟲魚を苦しめず、妄りに殺さず、草木を妄りに切らざる、皆これ陰德なり、凡そ陰德は人、知らざれども、天道に協ふ、

其十　支那、孟子（意譯）

子路といふ人は、おのれに過失あることを告ぐるものあらば、之を聞きて喜び、禹といふ王は善言を聞けば拜みしと請ふ、舜といふ帝はこれよりも大なることあり、人と善を同ふし、己を舍てゝ人に從ひ、人の爲に善となることをなして樂み、百姓より遂に帝となりても、人の爲にせざることとてはなかりき、人の爲に善をなすは、人の善をなすことを助くるものなり是の故に自ら善をなし、また人の善をなすことを助くるより大なるはなし、

天爵といふものあり、人爵と云ふものあり、仁義と忠信、善を樂みて倦まざるは、これ天爵なり、

其十一　支那（抄譯）

詐欺に由て富むは罪なり、嘉物に替へて惡物を與ふるは罪なり、容易に富貴を求むるは罪なり、他人の財產を害ふは罪なり、賣品を僞造するは罪なり、曲れる量目を用うるは罪なり、借りて返さゞるは罪なり、他人の作りし果實を掠むるは罪なり、奸計と詐欺とをもて地位を得るは罪な

り、けなして物を買うは罪なり、前金を取りて弱きものを害ふは罪なり
私事の爲に公事を棄つるは罪なり、上位に諂ふは罪なり、刑罰を行ふに
法を曲げ、無辜を科するは罪なり、律法を破り、賄賂を享くるは罪なり、質
樸なるものを欺くは罪なり、人の生命を弱くするは罪なり、
正義と孝心とにしたがへよ、老人を尊び幼者を助けよ、怒りて親戚を扱
ふは罪なり、夫婦互に敬はざるは罪なり、人相互に敬はざることを顯は
すは罪なり、人の師を敬はざるは罪なり、人の徒弟を謗るは罪なり、輕々
しく惡しき社會に加はるは罪なり、
孤兒と寡婦を憫れむべし、薄命なるものを憫れむべし、かれらの弱きを
嘲笑ふなかれ、人の危難を扶け、その成功を悅び他人の損害をおのがも
のゝごとくに歎くべし、多く與へて少しく受けよ、怒りて侮るべからず、
羽蟲に至るまでも、すべての動物を憫れむべし、艸木に至るまでも害ふ
なかれ、寢鳥を驚かすなかれ、その雛を殺すなかれ、理由なくその卵を毀
つなかれ、無辜を殺すものは友をころす仇なり、人を欺くものは毒を飲
めるものゝごとし、
過分の快樂を求め、過度に酒を飲み、大言を吐き、過激急噪なるは惡なり、
聖賢を嘲けり、天につぶやき氣候をのゝしり、罪のために天地に叫び、ま
た祖先の靈を蔑むがごときは、みな宗教に逆へる罪なり、

其十二　佛戒(抄出)

こは善を求め、またその安泰なる智識を得たる智者の事態なり、かれは
忠實にして正直と道理とのある者なり、柔和謙遜にして侮慢なし安心
あり愉快あり、苛虐なく富の苦心なし、安泰なり謹愼なり、傲慢なく貪慾
なし、かれは賤しき舉動なく、智者の戒懲を受くるに及ばず、すべてのも

のをして幸福ならしめ、また歡樂ならしむべし、生とし生ける者をして、強となく弱となく、大となく小となく、幽となく顯となく、遠きものも、近きものも、みな、盡く歡ばしめよ、

誰にても互に欺くなかれ、誰にても人に酷くするなかれ、誰にてもその隣人を害ふことを望むなかれ、その獨子を思ふ母親の心に滿つる愛のごとき愛をもてすべてのものを愛せよ、無限無量、不偏、純粹なる善心をして、普く天地の間に滿たしめよ、人もしこの心あらば、何時何所にありとも、『此所は聖き哉』と云はるなり、愛をもて怒に克ち、恩惠をもて貪慾に克ち、眞實をもて虛僞に克ち、善をもて惡に克つべし、怨恨に怨恨をもて終ることなく、たゞ愛をもて終るべし、こは古者の則なり、

其十三　支那佛說四十二章經、（意譯抄出）

佛者曰けるは。人もし輕々しくわれに惡をなさんか、われはかれらに報ゆるに、わが保つところの愛の宥敕をもてせん、なほ愈れる惡かれより來らんか、なほ增れる善われより出でん斯、る善業の香氣は恒にわれに還り、讒謗の災害はかれに歸せん、

佛者曰けるは、德あるものを罵る惡人は宛ら蒼天を仰て唾するがごとし、その業に由て蒼天は汚がるゝことなきなり、

其十四　支那佛說、（同上）

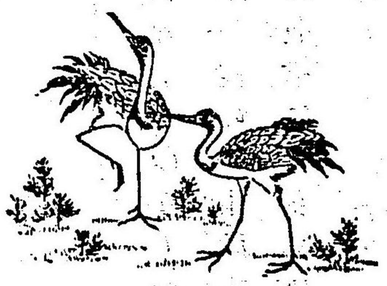
佛者曰けるは、これらの事は世に在て難きことなり――即ち貧くして慈善をなすこと、富豪にして信心あること、運命を免がるゝこと色慾と食慾とを制すること、快活なる目的を立てゝ之を求めずして已むこと、世にはたらきて、世に心をとめざること、その奧底まで物事を研究すること

と、思かなるものを輕んぜざること、自尊を捨つること、善なるべくまた之と同時に、よく學び、且巧みなること、宗教の秘義を曉ること、勤勉を待たずして人の目的を遂ぐること、衆人をして改宗せしめ、之を濟度することと、心と行爲と等しくあること、爭論を避くること、是れなり、泥土のなかより美はしき華生じ、粘土のなかより黃金そのほかの貴き物出で、牡蠣のなかより眞珠を取り、……斯く聊かの功德よりして、その恩惠を思ふの心ありやなしやに拘はらず、世界の貴きものゝ來ることあり、かれらは高貴なる血統に生るゝに及ばず、その勝利は既に認められたり、

其十五

羅馬、マーカス、オレリアス帝今を隔ること凡一千七百八十年前

なんぢ自ら純白なる天性を保つべし、その內部を顧みよ、內部は善の本なり、即ち生命なり、即ち人なり、……善人は、かれの內部に住みたまふ神靈に、仕ふる……祭司のごとし、



○唯一教

主義

問　唯一教の主義とは如何なるものなりや。

答　唯一教徒は左に掲ぐる三箇の根本的主義を有す。

基礎、吾人は口碑或は教權に依らず、合理的大道、科學的眞理を以て基礎となす。

方法、吾人は全く自由討究を以て研究の方法となす。

目的、吾人は一個人及び社會の道德をして益〻高尚なる地位に發達せしむるを以て目的となす。

問　右の根本的主義の他に、唯一教徒の一致せる點なきものなりや。

答　右の根本的主義は唯に唯一教徒のみならず、人として苟も公明正大なる信仰を樹立せんとする者は、何人と雖も之れに同意を表すべきは當然の事なり、故に此他更らに唯一教全躰の一致せざる可からざる條件なしと雖も、人心自然の傾向は唯一教徒をして、更らに夥多の相一致せる點を發見せしむるものにして、左に目下多數の唯一教徒の信仰の列擧すれば

第一、宗教とは人類の上帝に關する由縁を自然に表明するものなり、

第二、基督教の根本思想は、神を以て天父とし、人類を以て同胞とするに在り。

第三、神は永遠無究の權力、智惠、仁愛にして、物質界、精神界の源泉教導者及び整理者なり。

第四、人類は神の創造力の最も高大なる生産物なり、隨て其の發達すべき勢力と心靈とを有し、且つ宗教的道德的感情を有す、故に又人類は神の子と稱ふるを得べし。

第五、世界の諸宗教は各優劣の差別ありと雖も其の本源は盡く同一に出で、隨て其の目的に於ても同一に出づるを以て相互に教友として親睦すべきものなり。

問　何故に斯の如き基礎を宣言するの必要ありや。

答　唯一教は宗教として實に一種特色を以て社會に成立するものにして、彼の各國に在來せる宗教の如く、祖先傳來の口碑的教義を以て是非に係らず立教の大本と爲す者に非ずして、合理的大道即ち科學的眞理を以て立教の基礎とする者なり、故に宗教的事物は祖師傳來の教義或は慣例なるが故に之れを尊信するに非ずして、是れ能く道理に適ひ、實際に科學の眞理と相並行して悖らざるが故に尊信するものなり、然るに廣く世間の宗教界を見渡せは、往々にして其の說く所道理に適ふや否やを論ぜざるのみならず、宗教の眞理は世間の道理を以て標準として論ず可きものに非ずとなし只だ宗教幽玄の妙理は人間智識以外に位する者なれば、超自然的人物が神佛の托宣を直接に傳へられたる者に非ざれば、以て其の玄理を闡明する能はざるものとなし、而して其の教理の由來する處を尋ぬれは、即ち曰く、教祖何某なる者夢に神托を蒙り以て教法の基を立つとし、教祖の奇跡的事物は盡く實際ありたるものと斷定し、敢て其の理に疑問を容るゝを許さゝるは、通例一般宗教界の所論なり、故に此の如き宗教を信ぜんと欲する者は、須らく先づ自己の智識の價値を全然宗教上の事物の上に否定し、之れと同時に

世間の道理も一切宗教界に在ては無用のものたりとするに非れば、以て眞實なる信心者たるを得ざるに至るべし、然るに唯一教徒の所見を以てすれば、宗教も亦他の哲學科學と等しく、人間社會の一現象にして、哲學科學にして苟も道理に背反する處のものは、如何に哲學の泰斗、科學の大家の所説たりとも、之れを否定するを以て當然とするに、獨り宗教的事物のみ先人の糟粕を甘受せざる可からざるの理なしとす、故に唯一教徒は他の宗教信徒の如く、宗教的事物と他の學術的事物との間に、本質的の差別あるものなりとせず、宗教も亦人間社會の諸現象の一として之れを解釋説明し充分人類一般の道理心に對照したる上、彌よ眞理と認識するものに非されば、以て信仰の基礎とし、身命を捧げて熱心す可きものに非ずとなすに在り。

問　何を以て自由討究を主張するの必要ありや。

答　普く一般の宗教を見渡せば、何れも口碑、教權、教會の意見、聖書、經文信仰箇條、祖師の口傳等の上に立教の大本を建つるものなるが故に、之れに向つて批評討論を嚴禁す、勿論此れ等の條件にして盡く道理に適ひ、今日實際の事實と齟齬する事無くんば可なる可しと雖も、事の實際に至りては未開時代の口碑と地質學者或は人類學者の發見せる新事實と大に齟齬し、教會の意見は人心を束縛抑壓するものとなり、聖書經典の所論は進化の眞理と近世人智の華たる哲學の道理と背反し、信仰箇條と祖師の口傳は幽玄不思議にして科學の光明一度發射せば、直ちに退色するものたるを如何せん、惟ふに斯の如き虛弱なるものゝ上に立教の大本を定むるが故に勢ひ之れが批難を恐るゝものたるべし、之に反して千歳不磨の眞

理の上に立教の基を据たるものたらば、近代の批評、歴史的科學的研究は益々其の光輝を加ふ可きものにして、之れが色素の退消を恐怖し、批評討究を禁壓するの理あらんや。唯一教は全然斯くの如き信仰の上に薄弱なる前提を置かず、合理的、科學的の眞理を以て基礎となさんと欲するを以て、勢ひ討究の自由を奬勵し、益々煉て益々精髄を得んと欲するに在り、普通一般の宗教界にして、祖師何某の遺訓なるが故に、門徒たるものの之れに向て、彼是批評を許さずとし、或は聖書の明文あるが故に何々は動かす可からずとするが如き、宗教の世間に跋扈する間に於て、合理的宗教の光明を社會に透達せしめんとするに當りて、勢ひ研究の圍範を擴充し、自由に宗教的事物の討究を主張せざる可からざるに至れるなり、何となれば、凡そ眞理を發見せんとするものは獨り宗教のみならず、天文學

にても、地質學にても、將た醫學にても、何某氏の所說に反抗す可からずとして、討究に制限を加ふる事は、果たして策の得たるものなりや、天文學、地質學、醫學にして未だ曾て之れが制限を加へられたるを聞かず、況や比較的遙かに高尚幽玄なる宗教的眞理を發見せんとする者に於ておや。

問　個人的、社會的の道德を高尚ならしむるの目的は唯一教徒たらざるも亦同一なるに非ずや。

答　然り、苟も人として個人的幷に社會的道德の高尚なるを願はざるものあらんや、故に唯一教徒も亦其の大目的を達せんが爲めに、合理的信仰をも要し討究の自由も要するなれ、茲を以て上述の如く唯一教は普通一般の宗教家等と立教の基礎に於て、研究の方法に於て、天淵も只ならざる差異あるに關らず、此の大目的に向て進歩

するに於ては、萬人と共に同一徹に出づ、故に又天下の宗教は相互に交友たるものたりとの普通信仰を產出するものなり。

問　唯一教の基礎と他教の基礎とは、果して本質的に差異あるものなりや。

答　吾人は或る意味に於て本質的の差異なかるべしと信ず、何となれば吾人は口碑或は教權に依らずして道理に依り、眞理と認むるものを以て信仰の基礎とせり、然れども彼の一般宗教家の口碑或は教權に依る由緣は、彼れ等は之れを以て眞に道理に合へる眞理なりとし、信仰の標準となせる者にして彼の信仰箇條の如きも、當時之れを制定せし高僧等は、之れを以て合理的信仰なりとし、眞實人生を裨益するに足る可きものなりとして撰定せしものたれば、彼れ等に於ても事の實際に於ては合理的大道と認めしものを信認するものなりと雖も、只だ吾人の如く自由に討究し、果して自己の所信に誤謬なきや否やを試驗するの勇なきに依れり、吾人と雖も敢て先人の所論を盡く根底より否認するを以て快とする者に非ず、然れども之れを取捨撰擇するに、各自天稟の智能を以てし、決して胡椒丸呑み法を取らざるの差あるのみ、

《唯一教徒普通の信仰の問答は紙數に限りあるを以て略す》

唯一教の起原及其の略史

問、惟一教は何時の頃に於て起原せし乎、

答、或る意義に於て惟一教は、人類が抑も宇宙間に唯一なる神ありと信ぜし時、業に已に起原せるものにして、惟ふに惟一教なる名義は

專ら唯一神教を意味するものにして、譬へは古代の猶太教徒、或は初代のキリスト教徒の如きは、此の意味に於て無論惟一教徒たるものなり、乍併今我輩の茲に特に引用する處の惟一教は、殆んど今を去る事四百年以前より、近世の特別なる進歩的現象の一つとして社會に顯はれたるものなり。

問　惟一教は如何なる場合に於て起原せし乎。

答　大凡今を去る事四百年前、歐羅巴洲に於ける文學の恢復に伴ひ、宗教も亦他の哲學、科學、技術、文學及ひ政治等と共に、合理的自由思想より蘇生せしものにして、此の宗教に於ける合理的自由思想の結果は、終にキリスト教國の夥多の學者をして、從前キリスト教國に在て最も權威ありし、彼の神學上の三位一躰説を拒絶せしめ、此の結果は終に我が近世の惟一教を起原せしむるに至りたり。

問　近世の惟一教徒は、其創業の時に當て如何なる境遇に接せし乎。

答　抑も、近世惟一教の世に出つるや、其始めに於て、常に反對教派の爲めに虚待せられ隨て之れに忠死せしもの實に夥多なりし、故に新たなる唯一教々義は、當時キリスト教國に於て最大權威ありし、羅馬加特力教會の爲めに、刃と火とを以て迎へられたり。

又キリスト反抗徒が宗教改革を企てし後と雖も、殆んと一百年間は歐羅巴西部の諸州に於て常に羅馬加特力教會の爲めに、唯一教徒と等しく刑戮せられたる事跡往々之れあり、乍併宗教的自由思想は、彼の已に確立せし羅馬教會或は反抗教會等の之れに向て、敵意を表はすにも關はらす、次第にその勢力を逞ふするに至れり、而して當時宗教的自由思想家は、羅馬の法王或は反抗正統派教會の信仰々條よりは、寧ろ宗教の解釋に於ては道理の權威ある事を承

任せるの場合に立ち至りたり。

當時歐羅巴の東、北、西の三方諸州に於て、惟一教徒の數著しく增加したりしかども、如何せん今より殆ど一百年以前迄は、歐洲各國到る處何れも惟一教徒として教會或は協會等を組織するを許さゝりし、如何となれは當時政治上の權威は、常に羅馬加特力教徒、否らされは反抗正統派教徒の手に歸せり、現に英國に在て第十八世紀の頃に於てすらも彼の三位一躰の教理に反對する著作或は公會演說を爲せし者は之れを罰するに死罪を以てせり。

問、第何世紀中に於て、近世の惟一教會は始めて組織せられし乎、

答、今を去る事大凡三百年前、歐羅巴の東部諸州、即ちポーランド及ひトランシルヴァニヤ(今のオーストリア國の東南部を云ふ)に於て四百個の惟一教會及ひ十一個の大學校を起せり然るに其後此等の國々の政教を混交せる權威は羅馬法王の掌握に歸すると同時に、無慘にも此等の教會及ひ學校は盡く羅馬教會の鮮血淋漓たる腥き手の爲めに滅ぼされたり、此の慘酷なる出來事は、實に惟一教會の蘇生に達する一百年前にありし、以來此の惟一會教の組織は英、米の兩國に於て續々として起始せられたり。

英國に在ては一千七百七十四年ロンドン府に於て組織せられたる惟一教會を以て其鼻祖とし、米國に在ては一千七百八十三年ボストン府キングスチッペルを以て最初の惟一會教とす。

茲に於て之れを見れはキリスト教國に於て近世の合理的(或は學理的)自由精神は惟一教を容るへき勢力を得るや否や惟一教會は直ちに歐洲に於て組織せられたるものなり。

問 唯一教徒の開基者等は當時如何なる困難を排して歐米各國に興

りしや。

答「ユニテリアン」教は、宗教革命の其始め、一つの異端外道として英國に起り、當時に在ては異端アナバプチスト」派の名目の下に忠死し刑場の露と消へ果てし者其數實に夥多ありき、是れ即ち古代の「エリアン」派、今日の「ユニテリアン」教徒なり。

第十七世紀に在ては、未た「ユニテリアン」教會の組織成らすと雖も、「ユニテリアン」教徒の神に於ける信仰、或はキリストに於ける見解は、當時學識名望ある人士の間に漸々波及するに從ひ、英國々教會は勿論、其他普通「キリスト」教徒の間に、爭論の熱度を高めたり、有名なる詩人ジョン、ミルトン、哲學の大家ジョン、ロック及びアイザック、ニユートン氏の如きは全く「ナントリニテリアン」即ち非三位一躰說の主張者なりし。

第十八世紀に至ては、益々其氣焰を增發し、夥多の英國長老教會及ひ英國に於ける「ブロードチョルチ」(宏濶なる教會)の人々は當時、「ラチユーヂアンス」の名目を以て呼はるゝに至れり、故に英國々教會の牧師、傳教師は互に確定不變なる信仰箇條、教會規約の如き者を制定し、以て相結托し倍々外に對するの策を講するに至れり、此の時に際し、獨りセオフイラス、リンズレイ氏は、彼れの故鄉なるヨークセア州キャテリックに於て營みし處の生業を棄て、ロンドン府に到り、エセックス街の或る會堂に於て、第一「ユニテリアン」教會なるものを世に公けにしたるに由り、英國の長老教會に在ても別に信仰箇條を設けず、大博士プリエストリー氏の如き人々の運動に由て、益々自由信仰に傾き、此等の人々は終に「ユニテリアン」教徒の名を以て呼はるゝに至れり、然れとも此の名目は、其當時に在て尙

ほ異端外道として、衆人の嫌悪する處なるが故に、動もすれは、其教會の上に不幸なる國法の來らん事を恐れたれは、其教會政治及ひ組織等は猶ほ舊長老教會の如くにし、一方政治上の責を禦き、且つ順を逐て進歩の途を開けり、其他、舊派浸禮教徒の間に此の新思想漸次波及するに逮んてや、其多數は終に「ユニテリアン」教徒と一つの連絡を通ずるに至れり、而して當時蘇格蘭に於て最後に、三位一体説に反對するの故を以て、冒瀆罪に判定せられ、エヂンブロー市近郷に於て、磔刑に附せられし一つの壯快なる書生は、其名をタムス、エイキンヘッドと稱し、實に一千六百九十六年の事なりき、蓋し當時エヂンブロー市に於ける宗教家は極めて頑固なる「カルヴィン」派の門徒なりしが爾來自由討究の方法を適用して、「ユニリアン」派に轉じ、漸次に仁慈主義のユニテリアン派に轉するものあるに至れり。

問　唯一教徒は過去一百年間に於て如何なる進歩をなせしものなりや。

答　惟一教會は其組織せらるゝや甚た迅速なる發生を爲さゝりし、而して惟一教の歴史は實に究迫と忠死とに由て充滿せられたり、故に惟一教會は彼のキリスト教國に在て、宗教的團体の一としては非道なる精神上の虐政に由て壓制せられたるは疑ふへからさる事實なり、此の故に其斷判自立するや更らに他の宗派樣の團体を組成する事を忌避せり、如何となれば其の新宗派を組織せるに由て又更らに各自の上に、新たなる虐政の君を置き、隨て自他の思想或は精神を束縛するに至らん事を恐れたれはなり。

當時歐米諸洲に散在せし惟一教徒は、彼等各自の信仰又は思想上

の自由を妨ぐるの恐れある處のものは、何物に限らず盡く之れを組織する事を、惡みたり、然れとも信教の自由が一般の輿論となり、其安全なるを保證せし以來、惟一教徒は日々各自の信仰を補佐し、又は自由なる合理的宗教を、弘布するか爲めに、多少活潑なる運動を始め、或は教會或は倶樂部等を組織せり、而して近世の一種特別なる勢力として、惟一教徒は各々箇人的の働きを以て、普通文學界に顯はれ、或は演說に或は著作等に從事せり、之れに由て惟一教徒は他の各宗派の働きに比しては、歐羅巴及ひ亞米利加諸洲に於ける近世宗教界の思想及ひ生活の上に廣大なる普及力を與へたり。キリスト教の各派、就中羅馬加特力教會の如きも亦多少此の近世の合理的宗教思想の爲めに感動せられたり、而して惟一教徒は此の合理的宗教思想の先導者又は代表者として世上に知られたるものにして惟一教は此の廣大なる字義の範圍内に於て、近世の合理的自由宗教思想の發生力たるとは疑ふべからざる事實なり。

問　當世紀に於ける惟一教の著明なる結果は如何なるものなる乎、

答　當世紀中に於て、特に惟一教をして顯著ならしめしもの二あり。其一、人類の今や已に信認せし處の哲學及ひ科學の新世界を發見せし事により惟一教徒の嚮きに艱難の中になせし運動の要用たりし事を明かに是認せし事是れなり。當時惟一教徒は將來の宗教界に於ては確かに其合理的信仰の上に安堵するを得る事を信じ彼等は哲學及ひ科學の眞理と宗教的眞理とを全く一致せしむる事に於て宗教の發達を企圖せられたり、而して此等の運動は第一以下に列擧する處の有名なる開路者の爲めに創始せられたり。

即ち博士ウヰルリアム、エレリー、チヤンニング氏の如きシエドウ、ペ

アーカー氏の如きロルフ、ワールド、エマルソン氏の如き、其他今日現在する夥多の教師又は學者等に由て大に其進歩を奬勵せられたり、就中其最も著明なるは英國にゼームス、マルチノー博士あり。

其二、惟一教徒の組織躰に對して、最初の感情的恐懼又は不信は漸次消滅せし事是れなり、惟一教徒は合理的宗教の實行及ひ其智識をして、倍々高尚なる域に發達せしむるの道を求めんが爲めに、從來の協會は勿論尚ほ處々に活潑なる新協會を組織し、且つ其維持法に於ても更らに完全なる方法を以てせり。されども惟一教協會の組織は幸にして未た曾て彼の想像的天啓説或は法王の威光の上に立てられし處の教會の如く、其會員の上に強制又は專斷的威權を恣にするに至らず、否な將來に於ても必らす如此境遇に至らざるべし。

惟一教徒の組織せる協會の性質に付き、今特に注目すべきものは、即ち自由獨立なる宗教思想家の協同に在るなり、是れ恰も今の哲學者或は科學者等の協同せる團躰、或は協會に等しきものにして、決して通常キリスト教國に於ける專斷固定の教會的組織に類するものにあらざるなり。

問、惟一教今日の狀態如何。

答、一般の思想及ひ生活の上に於ける勢力としては、惟一教は今日の如く深く人心及ひ其生活を支配せし事あらざるなり、現に今日の正統派基督教會の多數の説教者、或は有識者は、今より五十年以前に於ける惟一教徒の説を主張せり、而して宗教上に關する文學者は今日となりて全く合理的のものたらされは世に容れられさるに至れり。現に今日多數の著名なる政治家又は學術家は、其宗籍を

何派に置くにも關はらず、皆な自由なる合理的宗教家となれる者なれはなり。

扨て今日(一千八百九十一年)惟一教なる名義の上に組織せられたる宗教的協會は歐羅巴諸洲に於ては實に夥多なるものなり、現にホンガリー國に於は百十個處の教會及ひ之に附屬する三個處の大學校ありて中には隨分著名なる博識者又は文學士あり。

スウヱツル國に在ては今日の普通教會には、惟一教徒及ひオーソドツクス基督教徒(三位一躰説を奉するもの)を混交して特に區別せされとも、其中には多數の惟一教主義を取るものあり、就中同國ゼノヴア府に於ては、其昔し彼のキヤルヴヱン(オーソドクス派中の一派をキヤルヴヱン派と云ひ同氏の開基する處に係る)の出生せし地にして、現にサーヴヱタス(第十六世紀の半ば頃に於て惟一教主義を奉ずるの故を以てキヤルヴヱン派の爲めに焚燒せられしもの)を燒殺せし地なるにも關はらす今日に在ては自由信教即ち惟一教主義の大に流行するを見るに至りたり。

瑞典(スウエイデン)那威(ノルウエイ)の兩國に於ては、稍や已に教育を受けたる人士の間に於て此の惟一教の主義を抱有するもの實に夥多なりと雖も、如何せん同國今日の國法に依り、三位一躰の教義即ちキリストの神性を信せざる宗教的組織の存立を嚴禁せられたるか故に、有望なる惟一教徒も手を束かねて爲す事あるを得さるの塲合なり、日耳曼聯邦に於ては古來自由思想の恒に發生せし處たりしが、就中近世に至りては其學術の發達を以て著明なり、同國政府の一千八百六十一年に於ける統計年鑑を閲するに、只だ南方日耳曼に於てすら當時已に二十五萬五千人の惟一教徒ありしを見る、其他同國の

ロテスタンチンフェライン（宗教家の聯合協會）の如きは自ら惟一教徒の協會ならざるも、惟一協會に向て自由に之れと聯合する事を承諾せり。

同國に於て、惟一教文學は普く世間に流布せられ、現にチャンニング氏或はパアカー氏の著書の如きは日耳曼語を以て飜譯せられ、弘く其販路を有するを見るは即ち其實證たり。

佛國に於ける自由派プロテスタント教徒は、大に吾人の注意を喚起する處のものにして、惟一教徒の羽翼とも云ふへきものなり、而して之れと聯合する人士の内には有力なる宗教家、教育家、文學家及ひ政治家等あり就中吾人の常に耳にする處のものは、彼の有名なる亞米利加の惟一教開導者チャンニング博士の著書が佛國に在て好評を博する事是れなり。

阿蘭陀に於ける自由宗教家等は、未だ惟一教徒の名稱を冒さゝるも、其實は惟一教徒と同主義なるものにして、其勢力は實に強大なり、同國の有名なるライデン大學は現に其配下に在り。

現今英國に於ける惟一教會の數は、三百五十個にして此等を總括して成れる一個の大英國惟一聯合協會及ひ夥多の地方中會あり、其他慈善的協會等は枚擧するに遑あらず、就中其最も新しき慈善的運動はロンドン府に在ては、彼のロバート、エルズメヤアと名つくる宗教小説を著作し、名を當世紀の小説家中に轟かせし、ハンプレイ、ウアード婦人に由て創業せられ專ら貧窮の子弟に教育を與へ、其他貧窮人を補助して普通生活の道を得せしめんが爲めに設くる處のものにして、同しく惟一教徒の保管する處たり。

其他蘇國及ひ愛兒蘭のプレスビテレアン教會も亦近年大に惟一

教の自由的思想の爲めに感化せられしものあるを見るに至れり。北米合衆國に在てはアメリカン惟一教徒聯合協會の他に、一つの大米國惟一教徒聯合大會、及び廿四個の地方中會あり、而して此の地方中會は或は一州或は兩三州に跨りたるものあり、或は合衆國を區畫して西部諸州中會、或は中央部諸州中會或は南方諸州中會、或は太平洋海岸中會等ありて、各々其地方の教會及び倶樂部等より成立せり。

又婦人傳道會なるものありて頗る其の勢力を全州に逞しふし、其の他大米國惟一教徒日曜學校聯合協會、或は西部惟一教徒日曜學校組合等ありて、此等の傳道會又は日曜學校聯合協會等の出版部はマサチウセット州ボストン府に於て其本部を設置せられ、米國に於ける惟一教徒の内には、彼の文學、教育、慈善、政治及ひ學術等に向て最も著名なるもの實に夥多あり、就中詩作の大家としてはブライアント氏ロングフエロー氏ホイチアー氏(惟一派クエッカー)ホームス氏及びロウエル氏等あり、歴史學の大家としてはバンクロフト氏モットレイ氏プレスカット氏ヒドレッス氏及びパアクマン氏等あり、教育の大家としてはホラス、マン氏及ひ近頃七名のハアヴアード大學校々長あり、學術の大家としてはアガシー氏ピヤアース氏バウドウヰッチ氏フヒスク氏及びレ、コンテ氏等あり、政治家としてはエヴエレット氏サムナー氏ウエブスター氏アダムス氏(同名の大政治家二人あり何れも惟一教徒)カルホーン氏ホーラス及びカールチス氏等あり、法官には高等法官マーシヤル氏及ひパアーソン氏あり、判官にはストーリー氏ミラール氏等あり、著作の大家としてはホウブル氏ホーソーン氏リプレイ氏テイロル氏等

あり、婦人社會に在て著名なるはマーガレット、フーラー。リデヤ、メリー、チャイルド。ルクレシヤ、モット。ヘレン、ハント、ヂヤクソン。メイエー、リヴァモーア及びヂユリア、ウード、ホウ等あり。

米國に於ける夥多の教會は、未だ進んで惟一教會の名稱を冒かさゝるも、多少此の惟一教の主義及ひ信仰に感動せられたるは實際の事實なり。

惟一教徒は、特に米國に在て彼のユニヴァーサリスト教徒とは多少相互に携帶するものにして、其他米國に於ける多數の自由思想を抱ける獨立協會は其實際に於て盡く我か惟一教徒の協力勞働者たるなり。

其他惟一教徒は、印度に在ては彼のブラモソマヅ(印度信神教徒)の好友なり。

以上の事實によりて之れを見れは今日に於て此の惟一教の基礎たる思想上の自由及ひ合理的主義は全く近世の學術界に於ても受容せられたれは、此等學術界に於て起る處の協會或は其他の團躰の如き、強ち惟一教徒の名目を冒かさゝるも是れ亦同一の主義に因て成立せられたる事を了解するに足るべし。

唯一教と所謂正統派基督教との比較

問　神に關して如何なる差違あるや。

答　正統派にては三位一躰の神を信じ。唯一教にては神を以て唯一なりと信ず。

問　三位一躰説の大畧は如何。

答　聖父の神、聖子の神、聖靈の神とし、此の三神は各自完全なる個人的性質を有し、更らに優劣ある事なし、故に父、子、靈の三躰は何れも其の光榮に於て、威光に於て、靈智に於て、權力に於て、等しく無限無究なり、而して其の差異は、聖父のみは自在にして、聖子は聖父の産み玉ふものにして、聖靈は聖父子より發光或は出せるに在り、然れども聖子、聖靈と雖も敢て始めあるに非ず、聖父と共に無始にして無終なりとす、此れ等三神は斯の如くなるを以て、名自一個躰にして、其の無始無終、全智全能にして在さゝる處なき完全圓滿なる神たる狀態は決して三躰唯一となりし時と同一なりと、信仰せり、換言せば三位一躰の教理は神を以て全然唯一にして又全然三個なりとし、全然三個にして又全然一個なりと信ずるものなり。

問　唯一教は何故に三躰一躰説を否定するや。

答　吾人は人心自然の法則界に如此混雜なる論法を容る可き空虛なきを以て、之れを否定するものなり、何となれば一個は同時に三個となり得可からざるが如く、既でに父、子、靈と區別して各々已でに完全なる個人的存在者と見做すと、同時に之れが個人的性質を否定せすして、直ちに完全なる三個人を以て完全なる一個人と認識する能はざるを以てなり、況や子は父の産み玉ふ者とせば、父より後に出で、靈は父子より發出せしとせば、既でに父子の後に出でたるを認めさる可からず、然らば何を以て三位は共に無始なりと云を得んや、數歩を讓りて、子と靈とは父と共に無始に自在せりとするも、既でに子として、靈として、父より出づると云へば、出でさる以前を追想するは、人心思想の法則にして、實に止むを得ざる事と云ふべし、然らば子と靈とは即ち其の子と靈として出でさる以前に在

て獨り父のみ自在したるものにして、子と靈とは勿論始ありし者なりと云はさる可からず、蓋し人の心裡に於て『原因は必らず結果に先つて存在せり』との思想は動かす可からざるものにして、人若し此の思想を撲殺せざる限り、何を以て彼の説に隨喜するを得んや、既でに產れたり、結果たりし上は、何を以て無始なりと確論するを得んや、約言せは、三神一躰の説にして人の理性を滿足せしむるを得は、何を以て八百萬の神を以て一躰と信する説を非認するの口實あらんや。

問　三位一躰説は基督教の本旨なりや。

答　正統派基督教會に在ては、三位一躰の説を以て其の根本的教義とし、無論基督教の本旨なりとせり、何となれば苟も宗教として、所信の神の定義は即ち信仰の基礎たればなり、故に之れを否認する者は如何なる宗派と雖も正統なる基督教派と稱するを許さざるなり(非耶蘇主義)

之れに反して唯一教徒は、之れを以て基督教の本旨とせざるのみならず、ナザレ村に產れ給ひし大聖耶蘇の教訓を主張する者を以て基督教徒とせば、彼の三位一躰説の如きものは、全く基督教以外に置て可なりと主張すべし、何となれば吾人、否な、何人と雖も新約全書の耶蘇の教訓中未だ曾て斯る神秘不可思議の論説を發見する能はざるべし、吾人は反て當時希臘附近に於て「ノスチック」哲學として世に知られたる異邦人プレトウの「ロゴス」説を其の儘基督教の基礎に代用せしを知るに難からざるなり(耶蘇教主義)

元來此の説の耶蘇教中に混入せしは、遠く紀元三百廿五年頃の事にて、世の所謂『ニケヤ』の信條として、曖昧なる三位一躰説とな

り次で『アサナシアス』信條として、判然三位一躰說を基督敎中而かも其の根本的信仰個條として採用したるものにして、今日の所謂正統派の信仰の根據たる處なり。

問　神の屬性の關して正統派と唯一敎との間に於て差異ありや。

神の屬性に就て正統派と唯一敎との一致する處は、遙かに差違の點よりも多きは勿論なりと雖も、前條に掲げたるが如き、根本的神の實躰論に相違あるを以て、亦多少相違の點なしとせず、左に大躰を摘錄せば。

一、正統派の神は、恰も舊約書に所載の神の如く、此の宇宙以外に鎭坐し玉ふ、威嚴にして近づく可からざる帝王の如く、吾人人類は之れに近づかんとするには、必らず中保者即ち救主を要する事恰も王侯貴族に近接せんとするには、必らず先づ執事令扶の中保を要するが如し。(專聖君主の神)

然れども唯一敎徒の神は、恰も新約書に所載の父にして、吾人に接近し、否な吾人の心裡に在し、仁慈圓滿なり、故に人若し神を去らんとするも、神常に吾人と偕に在りて直接に吾人の言行を鑑み給へりとなす、況んや神は萬有の內外に遍在し玉ふの神なるを以て、木石魚介の裡にも神融通し玉へりとす。(遍滿なる天父)

一、正統派に於て神は嫉妬の神たり、何となれば彼の敎理によれば洗禮を受けて基督の中保を依賴せざる者は、盡く神の前に祖先傳來の罪惡或は自ら知らざるの罪科に充滿せりとなす、故に不正不義を忌み玉ふ潔白の神は萬民を咒詛し、田畑は耕作の勞を要し、且つ人に生死の苦厄ありとす。(舊約的嫉妬の神)

唯一敎に於て神は純愛の神なり、故に人類が何種の宗敎を奉ず

るも誠意誠心を以て彼れを需むる者に、神は喜んで其の恩澤を感覺せしむるものなり、況や吾人は祖先傳來の罪惡或は知らざるの罪科あるを信ぜず、猶ほ數歩を讓りて、吾人に斯る罪科ありとするも、仁愛なる天父は其の愛兒を仇敵視せず咒詛せざるべしと信賴す、何となれば吾人は如何に自貧するも自ら神の仇敵たるの價ありとも思はざれはなり。(新約的慈父母)

一、正統派の神は放恣にして自己の前に宇宙の大法、即ち神の法律あるを輕んじ、容易に其の法律を變更し得る者なりとす、譬は奇跡を顯はし天則以外の事物を表章し、以て自己の爲めに人類の歸依を買收せんとするが如し。(放姿の神)

然れども唯一教に於ては、神も亦自己の法律を確守せざる可かららずとす、何となれば神は全智の神なれば中途にして變更せざる可からざるが如き、不完全なる法則を制定せざるべし、加之神は不正を惡み玉ふ正義信實の神なれば、神は自己に信實ならんが爲めに其の法則を蔑視せずと信ず。(治法の神)

一、正統派にては神は天下既知の通則以外の奇跡を行ふが故に信認するに足れりと爲す。(不可信認の神)

然れども唯一教にては、神若し天下の通則を犯せば、何を以て斯る神を信認するを得ん、何となれは吾人は神の不變なる律法により、吾人智識の根元を培養するものにして、吾人は此の世界に安心して居住するを得るは、即ち神は未來永劫其の律法を變更せず、昨日の經驗せし事實は今日も事實なりと信賴するを以て、なり、故に神恣に奇跡を行ひ、天下の通則を破壞せば吾人は斯る神を信認せざるのみならず、寧ろ速かに斯る宇宙より消滅し去